42251
教科書文庫
4
810
42-1928
20000
719471

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

4b
810
昭3

小國小女繪帖

水茎

資料室

昭和三年一月三十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

最新女子國文

文學博士 松村武雄編

廣島大學
教
71947
図書

4b
810
昭3

梅　（尾形光琳筆）

本書は國語及び國文學の本質に顧み、其の編纂法に於て舊套以上に一段の進出を試み、更に各卷並に通卷の綜合的體系と意趣とを重視し、國語教授上最新の用書たるに堪へしめんことを期したるもの、編者はこれが適當なる運用に依りて本科の目的の完全に達成せられんことを切望す。

最新女子國文　卷六　目次

一　獻身の女性……高須芳次郎　一
二　夕陽の美……高山樗牛　二
三　短歌選……一三
四　駒ちやん……泉鏡花　一六
五　源義朝……二九
一　船岡山……「保元物語」　二九
二　待賢門の戰……「平治物語」　三八
六　散策（詩）……國木田虎雄　四六
七　武藏野……國木田獨歩　四八
八　磐梯山……河東碧梧桐　五三

九　晩秋の吉野山……萩原井泉水　五八
一〇　天明俳句選……芥川龍之介　六九
一一　蜜柑……芥川龍之介　七一
一二　寂しき清正……土師清二　七八
一三　常磐樹（詩）……島崎藤村　八二
一四　年始の日記……沼波瓊音　八六
一五　歌御會始拜觀の記……尾上八郎　九一
一六　皇后陛下……下田次郎　九六
一七　雪……芳賀矢一　一〇〇
一八　女性の美……三島章道　一〇四
一九　母二篇……下田歌子　一〇六
一　原總右衞門の母……一〇六
二　ユーゴーの母……一一一
二〇　鐘樓守（詩）……井上康文　一一七
二一　楠氏三篇……「太平記」　一一九
一　櫻井の宿……一一九
二　母の教訓……一二三
三　如意輪堂……一二五
二二　梅花の氣品……豐島與志雄　一三〇
二三　さわやかな心……河野省三　一三六
二四　文化の意義……小野清一郎　一四〇
二五　日本……德富健次郎　一四三

自修文

一　レーミゼラブル……豐島與志雄譯　一四七
二　最後の一句……森鷗外　一六六

最新女子國文　卷六　目次　終

最新女子國文　卷六

高須芳次郎

一　獻身の女性

高須芳次郎　文學者。舊號梅溪。明治十三年大阪市生。

ペリー　アメリカ合衆國の海將。一八五二年我が國に來た。一七九四―一八五八年。

ブーチャチン　政治家、海軍軍人。一八五二年我が國に

江戸幕末の歴史を見て、いつも深く感動させられるのは、獻身の一生を送られた皇女和宮の御事蹟である。和宮の少女とならせられた時代は、我が國では多難を極めた秋であつた。米國水師提督ペリーが浦賀に來る、續いてロシヤの使節ブーチャチンが長崎に來るといふ有樣で、彼等が世界の大勢を說いて通商互市を求めたに對して、我が國では開港を主張するものと、昔通り鎖國を唱へるものとがあつて、その間に烈しい爭が起つた。時の總理大臣ともいふべき井伊

直弼は開國説に決して、斷然アメリカとの通商條約に調印し、一方、攘夷派を手強く抑へつけて、手當り次第に獄舍へ投げこんだので、彼は櫻田の雪と共に消えて世を去つた。

世はかうした有樣であつたが、當時の朝廷が外交について抱かれてゐた意見と、幕府の考とは一致しなかつた。幕府では直弼がその事を心配して、朝廷と幕府との間を圓滿にするために、内々和宮を將軍家茂夫人に迎へ奉りたいと朝廷に嘆願してゐたのが、直弼の歿後になつて、始めて實現せられるやうになつた。

和宮は仁孝天皇の第八子、弘化三年の御出生で、六歳の時、有栖川宮と婚約せられたのであつた。それ故普通の順序からいへば、當然有栖川宮と御結婚なさるわけであつた。ところが内外多事の時代となつて、朝廷と幕府との間柄がとかく圓滿を缺くやうになると、朝廷の大臣等の中にも、それ等のことに心を痛めて、朝幕一和の有樣に立

來た。一八〇二―一八八三年。

井伊直弼　彦根城主。安政五年大老となり、萬延元年櫻田門外で殺された。

家茂　十四代將軍。紀伊齊順の子。

有栖川宮熾仁親王。

歸るやうにと願ふものがあつた。それは幕府の當局でも同樣であつた。かうしたことから、和宮御降嫁のことは次第に話が進んで、とうく有栖川宮との婚約を雙方の諒解の下に取消すことにせられて、改めて和宮が十六歳の時、十四代將軍家茂の許に降嫁せられたのである。

德川家茂

當時の和宮の御胸の中はどうであつたらうか。私はなんとなく無限の感慨に打たれるのである。宮は家茂の許へ降嫁せられるまで、有栖川宮こそ未來の郎君であると思召して、優しい心の中にその事のみをひたすら忘れ給はなかつたであらう。それに優しい美しさに滿ちてゐる西の京の情味や風趣についても、宮には深い愛を感じてゐられたであらう。

さうした場合に思ひがけなくも、江戸へ下つて家茂に降嫁せねば

ならぬといふことを、突然廷臣から聞かれた時は、何となく失望と悲との交錯した感じに沈まれたであらう。けれども宮は御聰明で、自分が朝廷のために江戸に赴くのであるといふことを自覺せられるともう悲しんではゐられないと諦められた。

をしまじな君と民とのためならば
身は武藏野の露と消ゆとも

宮が詠み出でられたこの一首の歌を誦すると、胸の中で雄々しく自分の運命について樂觀せられると共に、どんなに苦しくとも、悲しくとも、朝廷のため天下のために良いならば、自分ひとりぢつとそれを忍ばうと決心せられた御樣子がよくわかる。

その後、宮は未だ馴れ給はぬ長途の旅に上られて、事なく江戸に着かれた。そして家茂夫人となられた。宮と夫君家茂との間は、春風の吹くやうに美しく、暖かつた。だが前將軍夫人天璋院が、とかく宮

前將軍

十三代家定。天璋院名は敬子。明治十六年、薨年四十七。

に對して冷たい態度を以て臨んだことは、未だ世の中の荒い風に當られない宮に取つては、かなりに苦痛であつたらうと思はれる。

それに當時の幕府は、財政の上に行惱んでゐて、宮が好まれた大御所風の生活も、思ふやうに實現せられる便宜がなかつたことは、宮の御心に寂しい、もの足りなさを印象したであらう。一體に宮は、運命の上に於て幸福でなかつたのである。

家茂は心から宮を愛した。宮にはそれが何よりの心強さだつた。だが家茂もまた內外多事の時代であつたから、思ふやうに家庭の平和を樂しむ餘裕がなかつた。困難な問題が引續いて起つて、家茂の心を惱ましがちであつた。

家茂は德川歷代の將軍の中で、一番悲劇的な人であつた。平凡な歷史家は、一概に家茂の人物が暗弱だつたといふが、未だ二十歲に達しないうちに將軍となつて、空前の多難な時に逢つたのだから、普通

京より来るとし。聞けば
君はいつ倚らせ
ますと
春にとはまし。

の暗君ならば、とても一日だつてそれに堪へきれないであらう。けれども家茂は、朝廷の間をも圓滑にして、外交問題にも見苦しい失策を取るまいと、いろ〳〵に心を碎いた。彼はたしかに純な、多感な、そして割合に賢い將軍であつたのだ。たゞ意志が少し弱かつただけである。

宮は家茂の性格やその周圍を見て、心から家茂に盡くさうとせられた。

文久三年家茂が入洛する時には、和宮もまた共に西の京へ赴かれた。そして家茂が大阪城に入つた時には、宮も陰ながら内助の功を立てられた。

だが宮に取つても、家茂に取つても、この上ない不幸が湧いた。そ

和宮御筆蹟

長州征伐　元治元年長州藩士の輕擧に對して、幕府が朝命を奉じて長州を征伐したこと。

れは慶應二年八月、家茂がその志した長州征伐が一段落をも告げないうちに病んだことである。新秋の風は冷たく家茂の病床に吹いた。そして彼の病は一日毎に重くなつて、とう〳〵八月二十日に薨じた。この時の宮の悲はどんなに深かつたであらう。空に澄む月の色も、叢の中に鳴く蟲の聲も、皆哀愁を誘ひ出すよすがとなつたであらう。

暖い愛の下に互に平和を樂しまれた宮は、家茂を失つてから、急に寂しさが身に沁みるやうに思はれた。世の中のあらゆる悲痛が宮の上に集つたやうに、盡きぬ涙に袖を濡された。その時宮は二十一歳であつた。宮は一生寡婦として暮らさうと決心せられた。そしてその美しい黑髮を惜氣もなく切つて捨てられた。あゝ、かうして後に生殘つてゐるよりは、いつそ夫君と一緒にあの世へ行つた方が、どのくらゐ幸福かも知れない。生の悲痛、生の寂寞、それはもう堪へ

られないと宮はうち惱まれた。

みつ瀬川世のしがらみのなかりせば
君もろともに渡らましものを

世の中の憂きてふ憂きを身一つに
とりあつめたる心地こそすれ

これ等の歌を讀むと、宮の痛ましい御有樣が眼に見えるやうである。

この時分から宮は靜寛院と稱せられた。

その後時勢が幾たびも急變して、幕府の亡びる日が愈〻近づいた時、宮は飽くまでも、幕府と朝廷との關係を和げることについて御心を盡くすことを惜しまれなかつた。家茂薨去の後は、幕府と宮との關係は以前のやうではない。京都では、宮が幕府を離れて歸られることを切に望んでゐたし、朝廷でも、宮の御身の上を非常に氣づかはれたのである。けれども宮は、一旦家茂夫人となられた以上、貞婦とし

ての道を全うしてゆくために、やはり最初降嫁せられた時のやうに、朝幕の一和を計るのが自分の務だとせられた。そして十五代將軍慶喜のためには特に力を添へられて、寛大の處置を執られるやう、親しく朝廷に嘆願せられた。

宮の心をこめられた嘆願は、確に朝廷を動かした。慶喜はそれを深く感謝した。そのうち王政維新の時代になると、宮は極めて質素な生活をして、わびしい日を送られた。そして京都からたび〳〵御迎の使者が來たけれども、德川家の前途をはつきり見屆けるまでは、歸らうとせられなかつた。

宮の御決心の雄々しさ高潔さは、その侍女以下に與へられた布告書の中に、凜然として現れてゐるが、その中で、「それ人たるものは、匹夫匹婦と雖も五倫の道正しく守るべきことは、衆の知るところに候。我苟も民の父母たる至尊の血脈に生まれ、天下の政務を天子より御

委任あらせられ候武將の妻たる身にて、この五倫の道失ひ候はば、孝貞共に立ち難しと心得居り候へども、何分不肖の身、素志も衆人には顯し難く、慚愧に堪へず候。」といつてゐられる。宮はこの決心で江戸に留つてゐられたが、龜之助が慶喜のあとを繼いで新しく駿河に封ぜられたことを聞いて、ほつと安堵せられた。

龜之助　徳川家達。慶頼の第二子。公爵。貴族院議長。

その後明治二年に入洛せられて、父帝の御忌をも修められた後東京に歸られ、麻布に住んでゐられたが、明治十年、病んで三十二歳で薨ぜられたのである。

宮の御一生は、美しい清い愛と、犧牲獻身の誠とを現された歴史である。家茂の歿後、深い悲にもうち勝つて、よく徳川家の前途を見屆けられたのは、立派な男子さへも及ばない雄々しい御心を示されたものである。私は宮の御一生が――殊に後半生が――寂しい色で包まれてゐることに限ない同情を捧げたいと思ふが、またさうした苦しい、寂しい運命に逢はれた宮が、平凡に幸福な生を送るところの女性よりも、遙かに尊い、充實した生を送られたことに對して、深い敬仰の情を捧げたく思ふのである。

二　夕陽の美

高山樗牛

高山樗牛　評論家。文學博士。名は林次郎。山形縣の人。明治三十五年歿、年三十二。

夕陽の美は、西洋ではあらゆる美中の最も美なるものの一つとして數へられて居る。それで苟も自然の美に興味をもつて居る詩人は、口を極めてその美を歎美して居る。我が國の文學にも、夕日影とか夕映とかいふ文字は見えて居るが、其の崇高なる光景を想はしむるに足る一首・一篇だに有しないのは聊か不滿足の感がある。

夕陽はすべて美しいが、中でも海の夕陽ほど美しいものはあるまい。自分は奥州の西海岸に育つたものであるから、海の日沒の景色は自分の頭に牢乎たる印象を留めて居る。あの夕の雲の、いろ〳〵

奥州の西海岸　作者の故郷は羽前の國鶴岡町。

のたゝずまひ、それに映えうつれる夕陽の光の濃さ淡さ、それに伴なうていろ〳〵に彩られる大海原、是等の一切が、日の傾くに連れて形も色もそれ〴〵變つて行く有樣、殊に大空の暮れてゆく色合などは、繪も筆も及ばない。

海の夕陽に對して自分の起す感情は、常に「平和」である。譬へば世界のあらゆる障碍に打勝つた大勇者が、今方に其の最後の戰鬪を後にして、榮光と平和とに擁せられつゝ、靜かに、其の墓門に凱旋するといふ樣な趣がある。夕陽の景色は如何にも崇高ではあるが、其の全體の上に何處となく疲れた老衰の趣がある。朝日の景色の、活き活きとして、今將に戰場に上らんとする初陣の勇士の概あるに較べると、兩々相對して、さながら人生の兩極端を現示して居る趣があるではないか。

あゝ、人、その青年時代は朝日の如く、その晩年は夕陽の如くありたいものではないか。爭を經ない平和は平和とする價が無い。我等は、一生の戰鬪に打勝ち、榮光の雲につゝまれて、靜かに西方の天に入りたいと思ふ。あゝ海の夕陽は美しいが、海の夕陽に似た人生の末路は、更に一層美しくはないだらうか。（樗牛全集）

三　短歌選

小澤蘆庵　歌人。尾張の人。享和元年歿、年七十九。

小澤蘆庵

○

小鳥おふ鳴子の繩に手をかけて
竹のは山の夕日をぞ見る

けふの雨に萩も尾花もうなだれて
愁へがほなる秋の夕暮

山遠くたなびく雲にうつる日も
やゝ薄くなる秋の夕暮

香川景樹

歌人。號桂園又は梅月堂。鳥取の人。天保十四年歿、年七十六。

尾上柴舟

歌人、國文學者、書家。文學博士。東京女子高等師範學校教授。名は八郎。明治九年岡山縣生。

○

旅人の袖とひとつになりにけり
末の原野のしののをずゝき

おのづからふむ人もなき我が門の
桐の落葉の露のさやけさ

限りなく悲しきものは燈の
消えての後の寐覺なりけり

○

黄なる葉の落ちつくしたる木の間より見る大空の青のつめたさ

枯れそめし草にぞまろぶ秋の日の胸の底まで照りとほる

香川景樹

○

木草みな祈をさゝぐ青澄める月の夜露に頭たれつゝ

尾上柴舟

窪田空穂

歌人。名は通治。明治十五年長野縣生。

前田夕暮

歌人。名は洋三。明治十六年神奈川縣生。

とて

○

鉦鳴らし信濃の國を行き行かばありしながらの母見るらんか

故郷に聞きにし蟲のかすかにも雜りて鳴くよ蟲賣る家に

初冬の澄みたる空を眺めつゝ柿を食ぶるつめたき柿を

窪田空穂

○

たおる白くひたして顔を洗ひたり初秋の朝の故郷の水

停車場を出づれば埃額をうつ疲れし心わびしかりけり

あやまちて切りし小指を冬の夜の灯のもとに見る寒さかな

前田夕暮

泉鏡花
小説家。名は鏡太郎。明治六年金澤市生。

四　駒ちやん

泉　鏡　花

私の家の裏庭とは、板塀一重の二階家は、門も羽目も黒く塗つてある上、窓も瓦も古くて黒いので、通稱を黒邸といつてゐる。その二階の窓、階下の濡縁、或は煤けた湯殿口に、勝手次第、氣の向いたまゝ白い猫がすつと顯れる。野良猫のやうに、のそ〳〵と出たり、泥棒猫のやうに、ごそ〳〵と引込んだりするのではない。雌猫で、樣子よくすつと顯れる。

眞白ではないが、茶の雜毛が殆ど目立たない處へ、事あつて身構へると、颯と靡いて、その斑さへ隱れる。けれども、白とも、青ともいはないで、名は駒で、近處の女達は、「駒ちやん〳〵。」と呼んでゐた。

初め見た自分は、宅の物干に丸くなつて日向ぼつこをするのも、ぬつと伸びて塀の上を傳ふのも、實は大禁物の蛇が、とぐろを卷いたり、

いやな病
こゝではペスト。

巴御前
木曾義仲に從つて勇戰した婦人。

うねりを打つたりする程でないまでも、餘りよい氣持はしなかつた。しつ！畜生！長刀を廻すやうな手つきで、ぎやうさんに遠くから追立てると、裏の家へ聞えますよ。」と女達にたしなめられた。

一年、夏の初頃からいやな病が始つて、大分流行の兆があつた。市内の其處此處に、病氣のぼやのやうな黑煙がぱつと上つた。鼠が毒を銜へて放火をする、この火は水では消えない。皆肝を冷した。

その時の駒ちやんの績といつたら――。梁へ逃れるのを、つと捕つて、引伏せて、ふつと咽喉を搔く樣は、姿優なる巴御前が、馬上に剛の敵と引組んで、ばらりと鎧の袖を搖る……と共に、敵の體は、もんどり打つて、地上に落ちる趣があつた。

そのたのもしさを想はれよ。

駒は全くよく捕つた。猫が鼠を捕るに不思議はないが、駒は全くよく捕つた。同じ捕るにも、巧拙のあることは拒まれない。夜中に

捕るにも、がたり、びしりと騷々しい音を立てるなどといふ事は決してない。　嚙んでも獲物の血を、板の間にも壁にも、一滴も垂らさない。疊には毛一筋散らさず、濡縁を遠慮なく歩いても、泥のぽつ〳〵としたあの梅の花などは留めなかつた。

はゞかりの壁の崩から、鼠の子が、ちよろ〳〵を通越して、そろ〳〵出る。　病沙汰のあつた折は、皆めら〳〵と火ほどに見える。　手のつけやうのない處に、駒は油障子の根に泰然と控へて、そんな鼠などは、出鼻の面を、蹲つたまゝ、一つ前脚で、とんと地を叩いたばかりで、もう獲物はぐつたりとなつて、凜とした髯の下にぶらさがり、ぶる〳〵と尾が震ふ。　さうして、活きてゐるのを銜へて、忽ち屋根を飛んで、飼主の許に歸り、その兒達の前に放し、走らせて、狂はせて、實地に捕る事を教へ、且食はせるのださうである。　齒形もつけず、潑剌たるまゝ捕つて運ぶのは、巧みでなければ出來ない、と皆がいつた。

女中などは、暗いまゝで足馴れた臺所の流元へ出ると、天井裏で、ことりと靜かな音がする。　見ると、二三段棚を釣つた天井近い破風の隅に、ほの白く乘つてゐる。

「あら、駒ちやん。」と頓興な聲を立てて、忽ち口許を袖で蔽うて、ごく低聲で、

「來……て……ゐ……る……の……。」と、かすれて囁く。　駒は前脚で輕く制して、髯を捌いて口を開ける。　にやあといひさうで、しかも微かな聲さへも立てないのは、

「來てゐますが、靜かにして下さい、騷ぐと鼠が參りませんから。」といふのである。

長き夜には宵から來て狙つてゐる。　が不意に出會ふものを驚かすまいために、ことりと何時もの合圖をする外には、物音を立てない。

がたりと響くと、

「あゝ捕つた。」

寢そびれた枕に響いてすぐに知れる。忽ち風の拔けるやうに窓を出て、路地を裏の屋根へとんと飛ぶ音。やがてと―んと聞えるのは、駒が寢床へ歸つたのである。

「あなた、一寸あなた、來て御覽なさいよ。」

「何だい。」

「駒ちやんが赤坊を連れて來ましたから。」

「ふう。」臺所で呼ぶのを茶の間で答へた。私は一向に氣乘がしない。

すると、妻の微笑んだ顏が襖口に顯れて、

「見ておやりなさいよ。折角、人のいふことをよく聞分けて連れて來たんですから。ゆふべ、臺所を片づけてゐるところへ、早めに棚の上へ駒ちやんが來ましたからね、『駒ちやん、お前さんこのあひだ赤ちやんが生れたといふから、おかゝをお祝に上げたぢやないか。赤坊を見せないとずるいよ。』つて、さういつて……。」

おかゝ　鰹節。

「あゝさもしいことをいふ。」

「だつてさきは畜生ですもの。」

「此方が人間だからなほさもしい。」

「でもよく分つてね。いま臺所口へ來て、小さな聲で鳴くから出て見ると、赤坊を連れて來てゐますの。見せに來たんですよ、聞分けて。……ね、見ておやりなさいよ、可愛のだから。」

女中の下駄を借りて、臺所を裏路地へ出て見た。四匹揃つてゐる。同じやうな白勝の三毛の、頭の平たい、ふよ〳〵と大きい、そしてまだ肩の細いのが、ちよぼりとした尾を動かしながら、鼻の先でふう〳〵と、根太石の、それでも鼠の行交ふらしい穴を嗅いでゐる。駒は芥箱の上に前脚をついて、胸に一匹黑斑を抱いて乳を吸はせながら、地面からふわ〳〵湧いたやうなその仔猫を、靜かにぢつと見てゐた。

「かはいゝね。みんないゝ仔だね。あゝいゝ仔だ。」

雨上の小春日和で、ぽつと眞綿のやうな地氣の漂ふ中で、頭を撫でるのを、駒は嬉しさうに見てゐる。この場合仔猫はたゞ春の陽に毛が生えたもののやうである。

「抱いてゐるのは御祕藏かい。……おやもう隱したね。……さあ、みんな連れておいで。犬が來るといけないから。」

その中に、ふら〳〵と木戸の下を潛りさうにするのもあれば、芥箱に立ちかゝつたのもあり、何時か駒の背に乘つたのもあると見るうちに、もう一つもゐない。子供の始末に、はしつこい駒のかひしやうは、さながら腹へ吸込んで、人目から消したもののやうであつた。

「凄いやうによく人の言ふことが分つてね……。」

いや〳〵それよりも、その頃、九段上に可なりな雞屋があつて、大分遠方にもかゝはらず出前をしてくれた。暮方、臺所でこの調味をして居ると、あゝ其處は畜生だ、鼠を捕ること上述の如き駒だから、鰯の脚や、秋刀魚の腸などを、むさぼるやうな不行儀なのではなかつたが、雞だけは何うも堪らないと見えて、疾く香を嗅ぎつけて、水口から面を出してにやあと鳴く。……二切、三切、はいよ、と何時も喜ばせて居たのだけれど、……さもしい話だが、この馳走は少し堪へる。臓物などを舐るのではないさゝ肉や、皮つきをぺろりでは、まつたく堪へる。もう御免と斷つて、おすそわけをしない事に成つて居た處——今度は縁側を覗いて——茶の間に鍋を掛けて、ふつふつと芳しい香を立ててゐる鍋に向つて、頸を伸ばしながら、座敷の眞中へぬつと來た。

「遣るよ。」

私は襲はれたやうに片膝立てて、

「お遣りよ。」と言つた。

「いけません。いけません。いけません。癖になります。きりが

ないんですから。――あつちへおいで、駒ちやん、いけない。」

にやあ――。

「遣つた方が可いよ。」

其處へ、框の戸が開いた。家内が取次に立つたのを見ると、待構へた客だつたから、とに角二階へ、と私は性急……以上の慌て者だから、いきなり階子段を驅上ると、ひやりと觸れるばかり裾にからんで、大きな毬の如く、ぱつと飛上つたものがある。忽ち目前の疊へ、白くもり上つてにやあと鳴いた。くらがりで、この時は悚然とした。遣るよ、と言つた然諾を解し、謝絶した家内の後は追はないで、わざ〳〵二階へ飛んで來て縋つたのである。と許りで、私はあつと聲を立てた。

駒も物干へつとそれた。

その瞬間、鍋は獨りで煮えてゐたのに、皿には鷄の肉が捌いてあつたのに――けれども、盜みも奪ひもしない。一臠掠めもしなかつた。

夕の雲は定まらず、朝の風は亂れた。長雨、また旱、蒸暑さ、また急に冷たい、暴風雨などと、よくない時候の續く中に、駒はだん〳〵年を取つて、老猫となつた。「汚いねえ。」と、近處合壁で物干竿を振廻し、バケツの水を掛けるやうになつた。

もう駒は飼はれた黑邸の棟さへ遠慮らしく憚つて、何處をそつと傳ふか、背戸續の、裏の平屋の霜の日蔭に蹲る。腰に張がなくなつて、べとりして毛も汚れてゐる。もう屋根へも出ない。

唯一度陽炎のやうに連れて來た四匹の仔猫は、何れも他へ貰はれて、その時胸に抱いてゐた黑斑だけが殘つた。同じく優しい大人しい雌猫で、もうその仔猫の世になつてゐるのである。餘り駒が甘やかし、目に立つて可愛がるので、飼主はそれを殘したといふ。大人しい優しい所ばかりが親猫に似て駒が半分殺して投げる鼠の仔にさ

へ後退をする、駒はそれを見ると睨みもせずいぢらしさうに抱きよせて、しつとりと頰ずりをするのだといふ事であつた。

「弱蟲やい、やい。」と女達も囃したが、黒斑は穩かな日に屋根へ出て湯殿の庇へ下りようとすると、三尺の高さもないのに、前脚をそつと下げるかとすれば、引つこめておど〳〵して後へ退く。向うの屋根で駒はその樣を見て、耳はきつと立てながらも、仔猫を世話する元氣もなくなつてゐる。

それでも一度、そののち女中が黒邸へ行つて、緣の下から、駒を抱いて來た事がある。

宅では雀を可愛がつて、いつも餌をやる。毎朝のやうに洗流しを撒いてやる。或時、ちゆ、ちゆと言ふ嬉しい聲も聞えないし、羽影も見えないのに、立處に餌の消えることが、屢〻つゞいた。まきかへても直ぐになくなる。一同氣をつけて見ると、鼠が食つたのである。臆病

者の雀は、ために恐をなして寄りつかないで唯悲しげに鳴いて居る。

「番をして頂戴――お婆さん。」

巴は尼になつてもう七十餘だ。さすがに鼠は出なかつた。

冬の日は暮れかゝり、雲暗く時雨の降りさうな、せはしく靜かに寂しかつた時、私は行きかゝつた奥の座敷で、吃驚して不意に膝をついた。どしん、みり〳〵、づしん、ぐわら〳〵〳〵。きやつ、わつといふ音に女の聲も交つて、近處合壁の者達が、皆あわてて路地へ飛出した。

それは駒の仔猫が、芥箱のそばで、萩に舞つてゐる蝶にからかつてゐた處へ、恐ろしい獵犬が襲つた時の音である。犬は某邸に飼はれてゐる焦茶色の洋犬で、渾名を鬼鹿毛といつた。馬に齊しい慓悍なのである。それがまつしぐらに地を摺つて飛んで來て、仔猫を狙つた。何處に守つてゐたか、瞬時に我が子を口に銜へたこの老猫は、雲から

驅下つたやうに見えた。そして横に退いて身をかはすとたんに、後脚で湯殿の戸を蹴た。その力そのはずみで、地から宙に二丈三尺、黒邸の屋根の眞中へさつと駒は飛んだ、ひとかたまりの吹雪が空に飜るやうに。

その際棒に渡した六七本の物干竿にさはつたので、息つく間もなく、竿はばら〳〵落ちかゝる。數の竿を鬼鹿毛は刎ねくゞり飛びのけるのに、あたりかまはず、戸にも木戸にも、荒狂ふ如くぶつかつた。そしてなほ空に躍つて仔猫を狙ふ。それらの響で、宅も隣家も向ひ合つた平家も、戸は外れる、木戸は刎ねる。臺所の棚のものは、皿も小鉢もばた〳〵みな落ちころげる。おまけに駒の威力ばかりでなく、あばら家の微力も加つて、それであのやうな大騒となつたのである。

私が見た時、獵犬は芥箱に顎をついて喘ぎ、駒は仔猫をかばつて、すつくと爪を立ててゐた。時雨の雲に乘つた化猫のやうに眼は光つて凄かつた。そして恐怖に腰の立たない仔猫を銜へて、駒は霜の消えるやうに姿を隠した。「七寶の柱」に據る

五　源義朝

一　船岡山

さる程に、内裏より卽ち義朝を召され、藏人右少辨助長朝臣を以て仰せ下されけるは、「汝が弟共の未だ多くあるなるを、縱令幼くとも、女子の外は皆尋ねて失ふべし。」となり。宿處に歸りて秦野次郎を召して宣ひけるは、「あまり不便なれども、勅諚なれば力なし。母か乳母か懷きて山林に逃げかくれたらむは如何せむ。六條堀河の宿處にある當腹の四人をば賺し出して、相構へて、道の程佗びしめずして、船岡にて失へ。」とぞ聞えける。延景、難儀の御使かなと心憂く思へども、主命なれば力なし。涙を袖に收めつゝ、泣く〳〵輿を舁かせて、彼

船岡　山城國愛宕郡。今京都市の内。

入道殿　源爲義。
頭殿　源義朝。
北山雲林院　山城國葛野郡衣笠村。

の宿處へぞ赴きける。

母上は折節物詣の間なり。君達は皆おはしけり。兄をば乙若として十三、次は龜若とて十一、鶴若は九つ、天王は七つなり。此の人々延景を見つけて、嬉しげにこそありけれ。秦野次郎「入道殿の御使に參つて候。殿は十七日に比叡山にて御樣を替へさせ給ひて、頭殿の御許へ入らせ給ひしを、世間もいまだつゝましとて、北山雲林院と申す所に忍びて渡らせ給ひ候が、公達の御事覺束なく思召し候間、御見參に入れ奉らむために具し奉つて參らむとて、御迎に參つて候。」と申せば、乙若出で合ひて、「誠に樣替へておはしますとは聞きたれども、軍の後はいまだ御姿を見奉らねば、誰々も皆戀しくこそ思ひ侍れ。」とて、我先にと輿に爭ひ乘られけるこそあはれなれ。これを冥途の使とも知らずして、各輿どもに向ひつゝ、「急げや急げ。」と進めける。羊の歩、近づくを知らざりけるこそはかなけれ。大宮を上りに、船岡山へぞ行きたりける。

大殿　源爲義。
下野殿　下野守源義朝。

峯より東なる所に輿舁きするゑて、如何せましと思ふ所に、七つになる天王走り出でて、「父は何處におはしますぞ。」と問ひ給へば、延景涙を流して、暫しは物も申さざりしが、やゝありて、「今は何をか隱し參らすべき。大殿は頭殿の御承にて、昨日曉斬られさせ給ひ候ひき。御舍弟達も、八郎御曹司の外は、四郎左衞門より九郎殿まで五人ながら、夜べ此の表に見えて候山本にて斬り奉り候ひぬ。君達をも失ひ申すべきにて候。相構へて賺し出し參らせて、佗しめ奉らぬ樣にと仰せ附けられ候間、入道殿の御使とは申し侍るなり。思召す事候はば、延景に仰せ置かせ給ひて、皆御念佛候べし。」と申せば、四人の人々これを聞き、皆輿より下り給ふ。

九つになる鶴若殿、「下野殿へ使を遣はして、いかに我等をば失ひ給ふぞ、四人を助け置き給はば、郎等百騎にも勝りなんずるものを、此の

由申さばや。」と宣へば、十一歳になる龜若、「誠に今一度人を遣はして、慥に聞かばや。」と申されける所に、乙若、生年十三歳なるが、「あな心憂の者の言ひがひなさや。我等が家に生るゝ者は、幼けれども心は猛しとこそ申すに、かく不覺なる事を宣ふものかな。世の理をも辨へ、身の行末をも思ひ給はば、七十になり給ふ父の、病氣に依つて出家遁世して憑みて來り給ふをだに斬るほどの不當人の、まして我々を助け給ふ事あらじ。あはれ、はかなき事し給ふ頭殿かな。これは清盛が和讒にてぞあるらむ。多くの弟を失ひ果てて、唯一人になして後、事の序に滅さむとぞ計ふらむを覺らず、唯今我が身も失せ給はむこそ悲しけれ。二三年を過し給はじ。幼かりしかども、乙若が船岡にて能く言ひしものをと、汝等も思ひ合せむずるぞとよ。さても下野殿討たれ給うて後、忽ちに源氏の世絶えなむ事こそ口惜しけれ。」と、三人の弟達にも、「な歎き給ひそ。父も討たれ給ひぬ。誰か助けおはしまさむ。兄達も皆斬られ給ひぬ。情をも懸け給ふべき頭殿は敵なれば、今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。然れば命助かりたりとも、乞食流浪の身となりて、此處彼處に迷ひ行かば、彼こそ爲義入道の子供よと、人々に指をさゝれむは家のためにも恥辱なり。父戀しくば、唯西に向ひて南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、宣へば、三人の公達、各、西に向ひて手を合せ、禮拜しけるぞあはれなる。之を見て五十餘人の兵も、皆袖をぞ濡しける。

此の公達に各、一人づゝ、傅共附きたりけり。内記平太は天王殿の傅、吉田次郎は龜若、佐野源八は鶴若、原後藤次は乙若の傅なり。さし寄つて髮結ひあげ汗拭ひなどしけるが、年來日來宮仕へ、旦暮に撫ではだけ奉りて、唯今を限と思ひける心どもこそ悲しけれ。されば、聲を揚げて叫ぶばかりにありけれども、幼き人々を泣かせじと、押ふる

袖の隙よりも、餘る涙の色深く、つゝむ氣色も顯れて、思ひやるさへあはれなり。乙若、延景に向ひて、「我こそ先にと思へども、あれらが幼心に、恐ぢ恐れむも無慙なり。また言ふべき事も侍れば、彼等を先に立てばや。」と宣ひければ、秦野次郎太刀を拔いて後へ廻りければ、傅ども、「目を塞がせ給へ。」と申して、皆退きにけり。

船岡山

即ち三人の首前にぞ落ちにける。乙若之を見給ひて、少しも騒がず、「いしう仕りつるものかな。我をもさこそ斬らむずらめ。さて、あれは如何。」と宣へば、外居を持たせて參りたり。手づから此の首共の血のつきたるをおしのごひ、髪かき撫で、「あはれ、無慙の者どもや。かほどに果報少く

生れけむ。唯今死ぬる命より、母御前の聞し召し歎き給はむその事を、豫て思ふぞ譬へなき。乙若は命を惜しみてや、後に斬られけるとつきても、又我が斬られむを見むにつきても、泣き止まりたる幼き者の、又泣かむも心苦しくていはぬなり。母御前の今朝八幡へ詣で給ふに、我も參らむと申せば、皆參らむと言へば、具せば皆こそ具せめ、具せずば一人も具せじ、片恨にとて、我等が寢たる隙に詣で給ひしが、下向にてこそ尋ね給ふらめ。我等かゝるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず、形見をも參らせず、唯入道殿の呼び給ふと聞きつる嬉しさに、急ぎ輿に乘りつるばかりなり。されば之を形見に獻れ。」とて、弟共の額髪を截りつゝ、我が髪を具して、若し違ひもやせむずるとて、別々に裹み分けて、各、其の名を書きつけて、秦野次郎に賜ひにけり。又「詞にて申さむずる樣はよな。今朝御供に參りなば、終に

八幡　山城國男山にある石清水八幡宮。

は斬られ候ふとも、最期の有様をば、互に見もし見え參らせ候はむずれども、なか〳〵互に心苦しき方も侍らむ。御留守に別れ奉るも、一の幸にてこそ侍れ。此の十年あまりの間は、假初に立離れ參らする事も侍らぬに、最期の時しも御見參に入らねば、さこそ御心に懸り侍るらめなれども、且は八幡の御計かと思召して、いたく歎かせおはしまし候ひそ。親子は一世の契と申せども、來世は必ず一つ蓮に參り逢ふやうに御念佛さぶらふべし。」とて、「今はこれ等が待遠なるらむ。疾く〳〵。」とて三人の死骸の中へわけ入つて、西に向ひ、念佛三十遍ばかり申されければ、首は前へぞ落ちにける。

四人の傅ども急ぎ走り寄り、首もなき身を抱きつゝ、天に仰ぎ地に伏して、喚き叫ぶも理なり。誠に涙と血と相和して流るゝを見る悲なり。内記平太は直垂の紐を解きて、天王殿の身を我が膚に當てて申しけるは、「此の君を手馴れ奉りしより後、一日片時も離れ參らする事なし。我が身の年の積る事をば思はず、早く人とならせ給へかしと、旦暮思ひて育み參らせ、月日の如くに仰ぎつるに、唯今かゝる目を見る事の心憂さよ。常は我が膝の上に居給ひて、髪を撫でて、いつか人となりて國をも莊をも儲けて知らせむずらむなど宣ひしものを、うたゝねの寢覺にも、内記、内記と呼ぶ御聲、耳の底に留まり、唯今の御姿幻にかげろへば、更に忘るべしとも覺えず。是より歸りて命生きたらば、千年萬年を經べきや。死出の山、三途の河をば、誰かは介錯申すべき。恐ろしく思召さむにつきても、まづ我をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らむ。」といひも果てず、腰の刀を抜くまゝに、腹搔切つて失せにける。恪勤の二人ありけるも、「幼くおはしましかども、情深くおはしつるものを。今は誰をか主と憑むべき。」とて、刺違へて二人ながら死にけり。これ等六人が志、類なしとぞ申しける。「同じく死する道なれども合戰の場に出でて主君

と共に討死し、腹を切るは常の習なれども、かゝる例は未だ無し。」と譽めぬ人こそなかりけれ。此の首ども渡すに及ばず、餘りに父を戀しがりければとて、圓覺寺へ送りて、入道の墓の傍にぞ埋めける。

［保元物語］

保元物語　鎌倉時代に成つた軍記物語の一。保元の亂を中心としたもの。作者未詳。

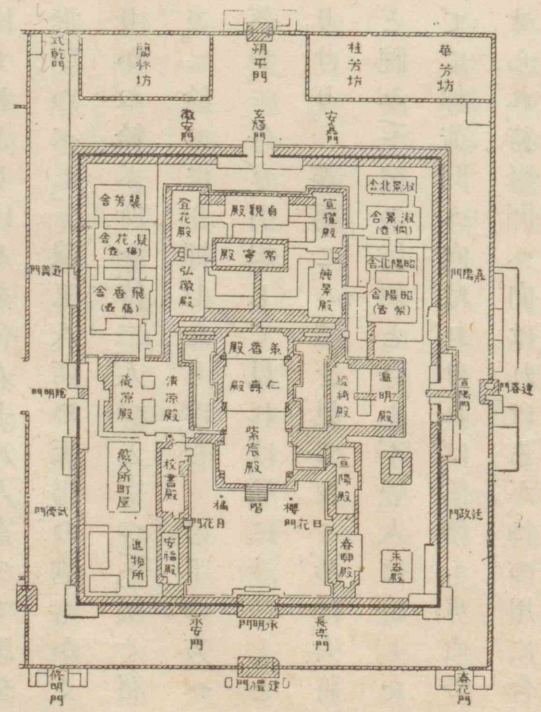
二　待賢門の戰

左衞門佐重盛は、生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫨の匂の鎧、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の冑の緒を締めて、小烏といふ太刀を佩き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黃桃花毛なる馬に柳櫻摺りたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛宣ひけるは、「年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げむこと何の疑かあるべき。誰かこゝに樊噲・張良が勇をなさざらむ。」とて、三千餘騎を三手に分けて、近衞・中御門・大炊御門、大宮表へ打出でて、陽明・待賢・郁芳門へ押寄せたり。

待賢門　京師大内裏の外郭十二門の中東方に面した三門の一。

大内には、三方の門を鎖し固め、表をば開かれたり。承明・建禮の脇の小門をも俱に開きて、大庭には馬ども多く引きたてたり。梅壺・桐壺・紫宸殿の前後まで、兵ひしと並み居たり。源氏の勢なれば白旗二十餘流うち立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流さしあげて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨をどつと作りければ、大内も響き渡りて夥し。鬨の聲に驚きて、只今までゆゝしく見えられつる信頼卿、顏色變りて草葉の如くにて南階を下られけるが、膝ふるひて下りかねたり。人

梅壺・桐壺　いづれも宮中の殿舍。



穆王八匹の天馬　周の穆王、八匹の駿馬に跨つて、天下を巡行したといふ故事。

並に馬に乗らむと引寄せさせたれども、太り責めたる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乗り煩ふ上、主の心にも似ず、逸り切つたる逸物なれば、つと出でむ、つと出でむとしけるを、舎人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒もかくやと覺ゆるばかりにて乗りかね給ふ所を、侍二人つと寄つて、「疾く召し候へ。」とておし揚げたり。餘りにや押したりけむ。弓手の方へ乗越して伏し様にどうと落つ。急ぎ引起して見れば、顔に沙ひしと附き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日ごろは大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、「彼の信頼といふ不覺人は臆したりな。」とて、日華門を打出でて郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血おし拭ひ、兎角して馬に搔乗せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に合ふべしとも見えざりけり。

左衛門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にて押寄せて、呼ばはり給ひけるは、「この門の大將軍は信頼卿と見るは僻目か。かく申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衛門佐重盛生年二十三。」と名告り懸けければ、信頼返事にも及ばず、「それ防げ、侍ども。」とて引退く。大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし。われ先にと逃げければ、重盛いよ〳〵勇みて大庭の椋の木の許まで攻めつけたり。義朝これを見て、「惡源太はなきか。信頼といふ大臆病人が、待賢門を、はや破られつるぞや。彼の敵追ひいだせ。」と宣ひければ、「承り候。」とて驅けられけり。續く兵には、鎌田兵衛・後藤兵衛・佐々木源三・波多野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・長井齋藤別當・岡部六彌太・猪俣小平六・熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫、以上十七騎、轡を雙べて馳向ふ。大音聲を揚げて、「この手の大將は誰人ぞ。名告れ、聞かむ。かく申すは、清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉惡源太義平と申す者なり。生年十五歳、武藏の大

大藏　武藏國比企郡。

藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしよりこの方、度々の合戰に一度も不覺の名を取らず。年積つて十九歳。見參せむ。」とて、五百餘騎のまん中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、縱樣、横樣、十文字に、敵をさつと蹴散して、「葉武者どもに目な掛けそ。大將軍を組んで擊て。櫨の匂の鎧に、蝶の裾金物打つて、黄桃花毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。おし雙べて組んで落ち、手捕にせよ。」と下知すれば、大將を組ませじと、防ぐ平家の侍ども、與三左衞門・新藤左衞門を始として、百騎ばかりが中にぞ隔りける。惡源太を始として、十七騎の兵ども、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中にたて、左近の櫻・右近の橘を七八度まで追廻して、組まむ組まむとぞ揉うだりける。十七騎に驅立てられて、五百餘騎叶はじとや思ひけむ、大宮表へさつと引く。大將左衞門佐は弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふ所に、筑後守つと參りて、「曩祖平將軍の二度生れ替り給へる君か

左近の櫻・右近の橘　紫宸殿の南庭にある。
筑後守　平家貞。
平將軍　鎮守府將軍平貞盛。

な。」と向ふ樣に譽め奉れば、今一度驅けて家貞に見せむとや思はれけむ、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百餘騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻寄せたり。又惡源太驅向ひ、見廻していひけるは、「只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩すとも、今度においては餘すまじ。おし雙んで捕れ、兵ども。」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、われ先にと進みければ、今度は、難波次郎・同じき三郎・瀨尾太郎・伊藤武者を始として、百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、惡源太、弓をば小脇にかい挾み、鐙踏ん張り突立ちあがり、左右の手を揚げ、「幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はむ。寄れや組まむ。」といふ儘に、先の如く大庭の椋の木の下を追廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけむ。又、大宮表へ引いて出づ。惡源太二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに、義朝こ

れを見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ、敵度々驅入るらめ。かれ速かに追ひいだせ。」といひ遣はされければ、俊綱馳せてこの由をいふに、「承り候。進めや者ども。」とて色も替らぬ十七騎、大宮表に驅出でて、敵五百騎が中へ面も振らず割つて入る。引きたてたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに、二條を東へ引きければ、「我が子ながらも義平は、よく驅けたるかな、あ驅けたり。」とぞ譽められける。

大將重盛・與三左衞門景安・新藤左衞門家泰、主從三騎かけ放れ、二條を東へ引かれければ、惡源太、鎌田にきつと目合せて「爰に落つるは大將とこそ見れ。返せや。」とて追つ懸けたり。既に堀河にて追つ詰めけるが、弓手の方に材木多く充ち滿ちたるに、惡源太の乘り給へる馬、片なづけの駒にて、材木にや驚きけむ、馬手の方へ蹶飛んで小膝を折りてどうと伏す。鎌田兵衞延ばさじと十三束取つて交ひ、よつ引

漢の紀信　漢の高祖、項羽のために滎陽に圍まれた時、紀信高祖と稱して楚を欺き、高祖を遁れしめた。

主辱められる　爲ニ人臣一者、君憂フレバ臣勞シ、君辱メラルレバ臣死ス、（國語）

いてひようと射る。重盛の射向の袖に、はたと中りて飛返る。やがて二の矢を射たりければ、押附にちようと中りて、箆かつぎ碎けて跳り返れり。惡源太、「是は聞ゆる唐皮といふ鎧ごさんなれ。馬を射て、落ちむ所を擊て。」と下知せられければ、又よつ引いて、追ひ樣に筈の隱るゝ程射込みたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳落され、冑も落ちて大童になり給ふ。鎌田、堀河を馳越えて、重盛に組まむと落合ふ。重盛近附けては叶はじとや思はれけむ。弓の弭にて鎌田が冑の鉢をちようと突く。突かれてゆらゆる間に、冑を取つて打着つゝ、緒を強くこそ締められけれ。與三左衞門馳寄つて中に隔り申しけるは、「漢の紀信は、高祖の命に代りて滎陽の圍を出し、終に天下を保たせき。主辱められるゝ時は臣死すといふに非ずや。景安爰に在り、寄れや組まむ。」といふ儘に、鎌田兵衞と引組んで、取つて押へける處に、惡源太、馬引起し、これも堀河を馳越えて、重盛に組まむと

飛んで懸りけるが、鎌田をや助くる、大將をや擊たむと思案しけれども、大將には又も寄せ合ふべし、正家を擊たせては叶はじと思ひ、與三左衞門に落合うて、三刀刺して首を取る。重盛は憑み切つたる景安擊たせて命生きて何かせむとて、既に惡源太と組まむとせられけるを、新藤左衞門馳來り、「家泰が候はざらむ所にてこそ、大將の御命をば捨て給ふべけれ。」とて、我が馬を引向け、中に隔てて惡源太とむずと組む。正家は重盛に組まむとしけるが、主を擊たせては叶はじと思ひければ、新藤左衞門に落重なつて首を搔く。この間に、重盛は虎口を遁れて六波羅までぞ落ちられける。二人の侍なからましかば、助かり難き命なり。「平治物語」

平治物語　平治の亂を中心とした軍記物語。保元物語と同一作者の手に成つたものとせられる。

國木田虎雄　詩人。故獨歩の子。明治三十五年東京市生。

六散策

國木田虎雄

私の散策は疲を知らない。

明るい初秋の日光は
黃色い野原と　生垣と　並木の茂葉に
一心に　慕はしい愛撫の銀絲を紡いでゐる。

鳶色の匂やかな小道は迷路のやうにはてもない。
然し　私は迷はない。
歩みにつれて　小蟲等の彈機仕掛の飛行が
胸の輕やかな動悸のやうにつゞく……。

收穫を知つた微風は　うら若い母親のやうに
優しさに　みだれてゐる。
青い深空に　白い月が
伯母さんのやうに微笑んでゐる。

おゝ　此のやうな心で明日もありますやうに。
私は他に　何も想はず。
私のひと足ひと足は
花やかな光のやうに　微風のやうに　失はれてゆく……。

「日本詩集」

國木田獨歩

國木田獨歩
小説家。名は哲夫。千葉縣の人。明治四十一年歿、年三十八、

秩父
武藏國秩父郡の諸山。

七　武藏野

昔の武藏野は萱原の果もない光景を以て鳴らして居たやうに言傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色と言つてもよい。木は主に楢の類で、冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新綠が萌出る。其の變化が秩父以東十數里の野に一齊に行はれ、春夏秋冬を通じて、霞に、雨に、月に、風に、霧に、時雨に、雪に、綠陰に、紅葉に、樣々の光景を呈する。其の妙は一寸西國や東北の者には解し兼ねる。元來、日本人は是まで楢の類の落葉林の美を餘り知らなかつたやうである。林と言へば、主に松林だけが日本の文學・美術の上に認められて居て、歌にも楢林の奥で時雨を聞くといふやうなことは餘り無い。自分は屢、忘つた。若し武藏野の林が楢の類で無く、松かする、時雨が囁く、木枯が叫ぶ。一陣の風が小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉が高く大空に舞うて、小鳥の群のやうに遠く飛去る。木の葉が落盡くせば、數十里の方域に亙る林が一時に裸になつて、蒼ずんだ冬空が高く其の上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄渡る。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の

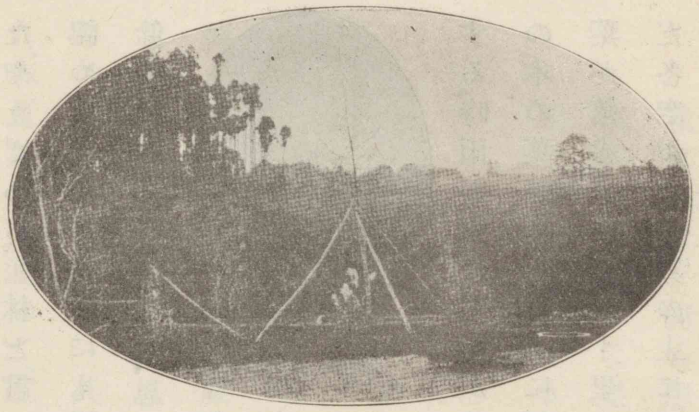
國木田獨歩

何かであつたら、極めて平凡な、變化に乏しい、色彩の一樣なものとなつて、さまで珍重するに足らないだらうと。

楢の類だから黃葉する、黃葉するから落葉

ツルゲニエフ　ロシヤの小說家。一八一八―一八八三年。

日記に、「林の奥に坐して、四顧し、傾聽し、諦視し、默想す。」と書いた。ツルゲニェフの文にも、「坐して、四顧して、そして耳を傾けた。」とある。此の耳を傾けて聞くといふ事が、どんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心に適つて居るだらう。



武藏野

秋ならば、林の内から起る音。冬ならば、林の彼方に遠く響く音。鳥の羽音、囀る聲。風の戰ぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲。叢の陰、林の奥にすだく蟲の音。空車・荷車の、林を廻り、坂を下り、野路を横切る響。蹄で落葉を蹴散らす音、是は騎兵演習の斥候か、さなくば、夫婦連で遠乘に出掛けた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲。それも何時しか遠

ざかり行く。獨り淋しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣の林で出しぬけに起る銃音。自分が一度犬を連れて近所の林を訪ひ、切株に腰を掛けて本を讀んで居ると、突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足元の犬が耳を立ててきつと其の方を見詰めた。それぎりであつた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には栗の木も隨分多いから。

時雨の音に至つては、是程幽寂なものは無い。山家の時雨は我が國でも和歌の題に迄なつて居るが、廣い〳〵野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横切り、又林を越えて、忍びやかに通り行く音の、如何にも幽かで又鷹揚な趣があつて、優しく、懷かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗て北海道の深林で時雨に逢つたことがある。是は又人迹絶無の大森林であるから、其の趣は更に深いが、其の代り、武藏野の時雨の更に人懷かしく囁くが如き趣は無い。

中野・澁谷・世田が谷・小金井　いづれも東京の西郊。

秋の中頃から冬の初に、試みに中野あたり、或は、澁谷・世田が谷、又は小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の疲を休めて見よ。是等の物音、忽ち起り忽ち止み、次第に近付き次第に遠ざかり、頭上の木の葉、風無きに落ちて微かな音を立て、それも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸が身に迫るのを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて、星斗闌干たる時、星をも吹落しさうな野分が凄じく林を渡る音を、自分は屢、日記に書いた。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分は此の物凄い風の音の忽ち近く忽ち遠きを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひ續けたこともある。

林に坐つて居て、日の光の最も美しいのを感ずるのは、春の末から夏の初で、其の次は黃葉の季節である。半ば黃いろく、半ば綠な林の中に歩いて居ると、澄渡つた大空が梢々の隙間から覗かれ、日の光は風に動く葉末々々に碎けて、其の美しさは言盡くされぬ。日光とか、

河東碧梧桐　俳人。名は秉五郎。明治六年松山市生。

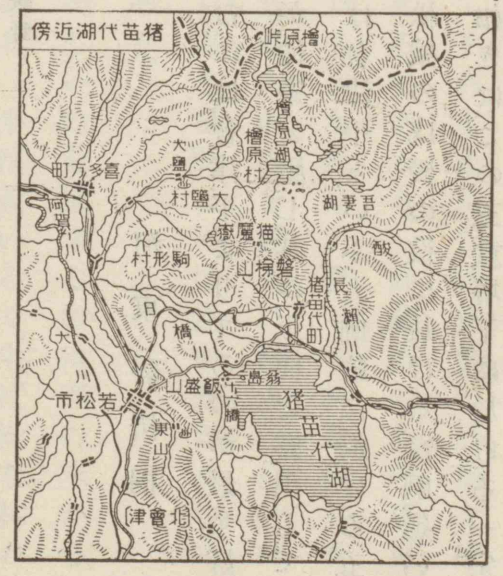
雹氷とか、天下の名所は兎も角、武藏野のやうな廣い平原の林が隈無く染まつて、日の西に傾くと共に、一面の火花を放つのは、此の平原に特異の美觀ではあるまいか。　「武藏野」

八　磐梯山

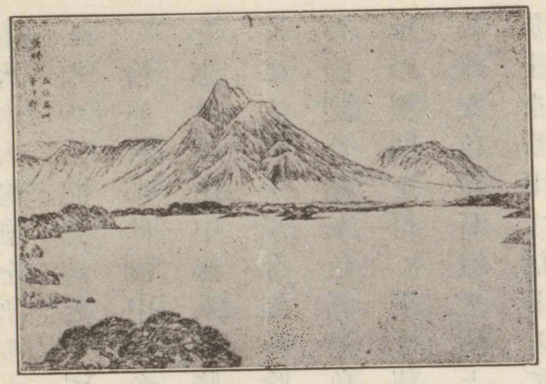
河東碧梧桐

富士的孤峰として磐梯山を望むには、會津平よりするのが最も好い。蓋し磐梯の主峯たる大磐梯が、從峯を壓し、其の正面を露出して立つが爲である。磐梯山は、言はば會津平といふ大伽藍に於ける五重の塔である。會津人の氣慨、若松城の戊辰の役に於ける慘劇、延いては飯盛山上の白虎隊の最期の如きは、この五重塔下に於ける一宗の堅固な信念を象徴して居るやうなものである。明治二十一年の大噴火によつて、殆ど相好を一變した磐梯山も、之を會津平より望むときは、昔とさまでの相違を來さなかつたのである。

猪苗代湖を隔てて見る磐梯山は、主峰大磐梯を側面から見るが爲、從峯赤埴生、櫛が峯等が各、峯頭を簇立して、會津平から望む程に秀麗な感を與へない。却つて峯頭に雲霧の搖曳する時、其の逶迤たる裾野の中腹位までを望見する方が、滑らかな鏡面のやうな湖水と相待つ調和の美がある。が、一碧明澄、片翳もなく晴れ渡つた時、主從の數峯のみでなく、殆ど二子山の如き觀をなして立つ他の一峯を併せ望むのも面白い。その峯こそ猫魔山といふ尾根つゞきの死火山で、往古怪猫、山に棲んで人を魅するとの口碑に因つて命名されもたのだといふ古代的な色彩が加はるからである。



磐梯山の眺望は、猪苗代湖を掩映する方面にのみ限るべきでない。又會津平原に君臨する方面にのみ限るべきでない。其の東北方、所謂磐梯陰と稱する裏面にこそ、特に見るべき光景が呈せられるのである。明治二十一年の噴火は、磐梯山上の一雄峯であつた小磐梯の姿を全滅する程の猛勢で、岩石土砂の大なだれを、悉く東北の裏面に落したのである。もと樹木に富み、高原的平地をなしてゐた磐梯陰は、殆ど其の土砂に埋沒され、處々に今日の湖水をさへ現出し、水勢亦附近の谿谷部落を浸蝕したのである。


磐梯山

試みに會津喜多方から米澤街道なる大鹽峠を越えて檜原村に出で、それより檜原峠にかゝる湖畔を歩めば、何人も先づ湖水の上に白

骨と立つ枯木の異彩に注意するであらう。この一現象さへ好箇の畫材として推奬することを恥ぢぬのであるが、これやがてその時の噴火の大慘劇を語るものなのである。即ち舊檜原村が水底の藻屑となつた記念碑として立つのである。

檜原村には、湖中の魚を漁る舟がある。其の舟を儀うて湖上探勝を志せば、山中無人の境地に、靜寂な崇高な靈氣に打たれる。南へ漕ぐこと約一里、今迄の陰森にして濕氣に充ちた空氣とは打つて變つた、强烈な赭灰色、赭黑色の、壯大無比な、人を壓迫し威嚇する、大パノラマの展開を行く手に望むであらう。言はば赭色を種々に染分けた複雜な色の石垣を、積上げ積崩して、それに熱湯、熱火を浴びせた一大焦土を現じて居るのである。この强烈な光景に接しては、思はず身を起して、息の詰るやうな苦しい叫びを發せざるを得ない。これは言ふまでもなく、磐梯の噴火壁からかけて、土砂の横溢した焦土的大

砂原なのである。

漸く近づくに隨つて、巨鬼の口を開いたやうな噴火口の斷層を始め、數里の間に土砂を撒いた大洶湧の狀態をも指摘することが出來る。殊に夏の日の强い日光を反射する、其の曠原の雰圍氣は、眼を眩ましし、喉を涸らさねばやまぬ。由來山嶽は靜的なところが本色であるに關らず、こゝには其の動的な力と權威とを、如何にも大膽に現して居るのである。會津富士の名をのみ聞いて此の山を見んとする人は、この餘りに懸隔の大なる兩面の相好に想到することは到底出來ぬ。會津富士の表面は淡粧した美人である。而もその裏面は怪鬼の姿である。日本に火山は多く、火山に附き物の地獄卽ち噴火口の活動も尠くはない。しかし、この焦土の怪奇に比して何物も遠く及ぶ所でない。火山の美は裾野の悠揚たる高原にあるとのみ限るのは、例の盆栽的風光に囚はれた偏見に過ぎない。「日本之山水」

荻原井泉水
俳人。名は藤吉。明治十七年東京市生。

甲子吟行
又野ざらし紀行。貞享元年から二年にかけて、芭蕉が東海・近畿を旅した時の紀行。

九　晩秋の吉野山

荻原井泉水

獨り吉野の奥に辿りけるに、まことに山深く、白雲峯に重なり、煙雨谷を埋んで、山賤の家處々にちひさく、西に木を伐る音東に響き、院々の鐘の聲心の底にこたふ。むかしより此の山に入りて世をわすれたる人の多くは、詩にのがれ歌にかくる、いでや唐土の廬山といはんもうべならずや。

芭蕉の甲子吟行中の名節である。其の頃の吉野はまことに斯くの如き深山幽谷の趣の中に、隱遁の人なども跡を斷たなかつたのであらう。其の山相水態こそ、昔のまゝであるとはいへ、大阪から六田まで一氣に電車の通ずる今日にあつて、こゝに二百年前の閑寂を求むるのは求むる方が愚であるかも知れない。

宿は、私が宿を乞ふと、それから雨戸が明けられた。緣側は木の葉

如意輪堂
如意輪觀音の堂。楠木正行の故事で名高い。

が散つてゐるまゝに戸ざされてゐたと見える。裏の方に大きな谿が見渡される、中の一目千本といふのださうな。花の頃の展望を主として建てたのであらうが、此の末枯の風情も亦面白い。みつしり茂つてゐたであらう櫻の木の葉がまばらになつた爲に、谷の底から小さい家が現れ、細い徑が現れ、而うして、そこを、鞄をかけた子供が二人身體を寄せあつて、袴のない裾から短い足を動かして、奥の方へ歸つてゆく。其の細い徑ののびてゆく方の高みに、一段の鬱林があつて、たしかに堂と見えるものは如意輪堂である。

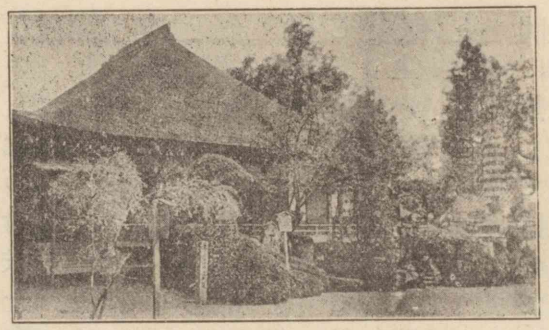
砧打つて我にきかせよや坊が妻

私は芭蕉の此の句の情景を心にうかべた。芭蕉が宿を借りたのは、きつと、小さい坊であつたらうと思ふ。此處には竹林院・喜藏院などといふ大きな坊は今日にも殘つて、やはり參拜者の宿をするのであるが、昔は其等の大きな坊の外に小さな坊が數多くあつたものだといふ。大きな坊には格式もあつて、妻帶することは難しかつたであらうし、假令、細君が居ても、人の目につくやうな所に出ては來なかつたであらう。「砧打つて我にきかせよや坊が妻。」と斯う親しげに言ひかけた調子から見ても、細君がまめ〳〵しく竈の下を焚いたり、泊り人に挨拶をしたりするやうな小さな坊を思はせる。その細君の後姿と砧盤とが、芭蕉の目にとまつた時、彼はふと興じて、此の句を口ずさんだものであらう。口ずさみはしたが、言葉に出して、「砧を打つてくれ。」などとは所望しなかつたに違ない。實際に彼が懇望し、

又細君が實際に砧を打つたりしたのでは、もう俳句にならない。「我にきかせよや」といふ作者の氣持は、決して其の事を希求するのではない。此の希求を發した心其自體に於て、卽ち其の刹那に於て、既に滿足し、完全してゐるのである。これが眞に完全性をもつてゐる俳句の味である。

又、此の句は芭蕉が、平生の感情である。そのやうな深い山中にあつて、たま〳〵宿を借りた坊の妻に、さうした戯のやうに興じた事をして、旅情を慰めて欲しいとまで、所望したいやうな氣持、それは、淋しく生きる人間と人間とが、ほんとに心おきなく觸合つた尊い親でなくて何であらう。さういふ親を、彼は平生、自然に對すると同樣に人間に對して持つてゐて、其の感情が此の句として流れ出たのである。又言へば、此の句は芭蕉が藝術的の幻想である、そのやうな晩秋の空氣をふるはせてとつぽん〳〵と音を立てる砧の面白さ、さびしさ。

「西に木を伐る音東に響き」と彼は書く。其の砧の音も亦、こゝで打てば、彼方の谷に反響するであらう。「山賤の家處々に小さく」と彼は書く。日が暮れてしまへば其の家も見えないが、ほと〳〵と打つ砧の音こそこゝに家がある、人間が住んでゐるといふことを互に知らせ合ふ、淋しい、面白い合圖ではないか、と彼は實際に打ちもしない砧盤から、幻のやうに砧の音を聽取したのである。



如意輪堂

如意輪寺へは、宿から近いといふ心安さに、日が暮れかけてから出掛けた。其の道は落葉がたまるまゝにしてあるので、歩くとかさ〳〵と音がして、蟲が鳴いてゐる。春は緋の毛氈でも敷くらしい掛茶屋が二つ三つ、谷川を

かへらじと
かへらじとかれて思へば梓弓なき數に入る名ぞとゞむる。
延元帝
後醍醐天皇。

覗くやうに建ててあるが、其の屋臺は骨ばかりといふ風に見えて、川の音が耳に著しい。萱がすんなりと穂を出し、男郎花がによき〳〵と立つてゐる。而うして女郎花は見えない。曼珠沙華が少しすがれてゐるが、此の赤さは實に淋しい。正行が「かへらじとかねて思へば」の歌をとゞめた如意輪堂は、秋風に御格子を堅く鎖して、うす墨色に、ちんまりしてゐる。延元帝の塔尾御陵はその後の石段を登つた處、松の翠の濃かな中に拜まれる。

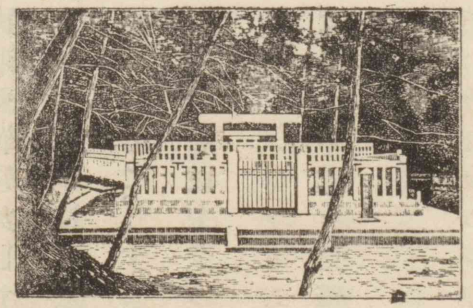
山を登り坂を下るに秋の日すでに斜になれば、名ある處々見殘して、先づ後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草

芭蕉の甲子吟行に斯く記されてあるのは此處である。芭蕉の當時は禁裡御質素の頃とて、御陵なども掃苔の事が行きとゞかず、此の句にある通のしのぶ草が、玉垣の内までも這ひ茂つてゐたものであ

らう。今は敷砂が白く清められ、ほろ〳〵と散る松の葉・櫻の葉すら數へられる許りである。それにしても、「悲哉北辰位高くして百官星の如く列なるといへども、九泉の旅の路には供奉し仕る臣一人もなし。奈何せん南山の地僻にして、萬卒雲の如くに集るといへども、無常の敵の來るをばふせぎとむる兵更になし。葬禮の御事、かねて遺勅ありしかば、御終焉の御形を改めず、棺槨を厚くし、御座を正しくして、吉野山のふもと、藏王堂の艮なる、林の奥に圓丘を高く築きて、北向に葬り奉る。寂寞たる空山の裏、鳥なき日既に暮れぬ。」とある太平記の文章に據つても、延元の昔の御事が今もなほ、まざ〳〵と偲ばれる。如意輪堂ではかん〳〵、〳〵と暮の鐘を打始めた。それは

藏王堂
藏王權現の堂。



後醍醐天皇御陵

軒に吊してある小さい鐘を、小僧が背伸をしながら撞木でたゝいてゐるのだ。その小僧は先き方、私に寶物を案内しながら「花に寢てよしやよしのの吉水の枕の下にいはばしる音」などと、後醍醐天皇の御製を讀上げてゐた子である。

藏王堂に私が來た時は、既にすつかり暗くなつて、十八間四面といふ廣大な其の堂は、扉を堅く締めきつたまゝ、仰ぐと、杉の木立が黑々とそびえ、其の梢と堂の高い屋根との間には、紺紙のやうな空があつて、銀の文字のやうな星がまばらに現れてゐた。

むさゝびがすぐ上の枝で鳴く。

今、私が歩いて來た谷の方を見ると、そこは一面の黑い海のやうで、ぽつちりと灯が一つ、それは如意輪寺の灯に違あるまい――ちらりともしないで、ぢつと澄みきつてゐる

西行庵の跡へは、朝寒の日が道しるべの石にさしてゐるのを見ながら登つた。大峯山の道である。金峯神社(奥の院)の物さびた祠を下から拜んで、右へ、杉の木立の深い感じにひたつて行くと、又石が立つてゐて、そこからは庵の跡へ行くだけの小徑を下るやうになる。櫻もかなりある、所謂、奥の一目千本とは、此の邊から奥の谷を指していふのださうだ。然し道端の薄が道を埋める程で、白く降つた雪とも見える。西行庵の跡といふ處は、そこに碑を立てる代りに、小庵を立てたといふ風である。もとの庵はこんな風でもあつたらうかと想像させるやうに、如何にもまことしやかに、荒削の柱を立て、荒壁をつけ、粗末な萱を以て葺いてある。

とく〳〵と落つる岩間の苔清水
汲みほすほどもなき住居かな

と詠じて、西行が汲んでゐたといふ清水は、其の庵から程遠くない。

金峯神社　藏王權現を祀る。

杉の根元、岩が露出してゐる處に齒朶などが生ひかゝつて、割竹で水を導いてあるところは、今の人のたくみであらうが、永い年の間に自然に出來た土の凹みが、好い湛へ處となつて、西行が又「淺くともよしや又汲む人もあらじ」と詠じた其の昔のまゝに、淺いけれども、清く澄んでゐる。芭蕉が――西行思慕の心の深かつた芭蕉が――甲子吟行の途中に、先づ伊勢に道をまげて、西行が暫く閑居したといふ西行谷を訪ひ、「芋洗ふ女西行ならば歌よまん。」と、彼なればこそ其の情趣を、西行をとり籠めたまゝの俳句とし、それから此の吉野へ踏込んで來たのも、西行の遺蹟を尋ねようといふ宿望を滿たしたい心が主なものだつたらうと思はれる。

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町ばかりわけ入る程、柴人の通ふ道のみわづかに有りて、さがしき谷をへだてたる、いとたふとし。彼のとく〳〵の清水は昔にかはらずと見えて、今も

淺くとも(下句)われにこと足る山の井の水。

とく〳〵と雫落ちける。

露とく〳〵心見にうき世すゝがばや

と芭蕉は甲子吟行に書いてゐる。西行が住んで居た時、ほた〳〵と落ちてゐた清水は、それから後、近よる人もないのに、四百年の間、いつもほた〳〵と垂れてゐた。「昔にかはらずと見えて、今もとく〳〵と雫落ちける。」と芭蕉が驚いた其の心持はうなづかれる。西行が獨りさびしく、深い自然の懷を指して探り入つた詩歌の道は、其の後、誰一人之を繼ぐものとてはなかつたが、それが俳諧といふものに姿を變へて、芭蕉の心に蘇つて來たのではないか。此の山中の一つの清水が、たとへ汲む者はなくとも、又、如何にも細い一すぢではあるが、綿綿として絶える事がなく續いてゐるやうに、自然の懷から湧き出るほんとうの詩歌の生命は、いかにも幽かでありながら、決して涸れる事がないといふ事を、西行の清水が爰に正しく實證してゐるのでは

ないか。此の天然のまゝの清水こそ、最も好く生きたまゝの西行を記念し、最も雄辯に西行の藝術を禮讚するものだといふべきである、

「中央公論」

蕪村　與謝氏。攝津の人。天明三年歿。

白雄　號は春秋庵。信濃しゝ。寛政三年歿。

几董　高井氏。京都の人。寛政元年歿。

曉臺　加藤氏、名古屋の人。寛政四年歿。

大魯　吉分氏、阿波藩士。安永七年歿。

蓼太

一〇　天明俳句選

菜の花や月は東に日は西に　蕪村

蕪村筆蹟

人戀し燈し頃を櫻散る　白雄

春の泊鯛よぶ聲や濱のかた　几董

若葉して水白く麥黃ばみたり　蕪村

金屏のかくやくとして牡丹哉　蕪村
衣更獨り笑み行く座頭の坊　曉臺
牡丹折りし父の怒ぞなつかしき　大魯
五月雨や或夜ひそかに松の月　蓼太
涼しさや旅に出る日の朝ぼらけ　樗良
橋落ちて人岸にあり夏の月　太祇
しみ〴〵と秋を惜しみぬ二三人　嘯山
蔓草や蔓の先なる秋の風　太祇
秋の風芙蓉に雛を見つけたり　蓼太
秋來ぬと目にさや豆の太りかな　大江丸
今朝秋と知らで門掃く男かな　存義
枯葦の日に〳〵折れて流れけり　闌更
靜かなる樫の木原や冬の月　蕪村

大島氏。信濃の人。天明七年歿。
樗良　三浦氏。鳥羽の人。安永元年歿。
太祇　炭氏。江戸の人。明和八年歿
嘯山　三宅氏。京都の人。寛政元年歿。
大江丸　大伴氏。大阪の人。文化二年歿。
存義　馬場氏。江戸の人。天明二年歿。
闌更　高桑氏。金澤の人。寛政十一年歿。

芥川龍之介　小説家。東京市の人。昭和二年歿、年三十六。

一一　蜜柑

芥川龍之介

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下ろして、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍しく私の外に一人も乘客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送の人影さへ跡を絶つて、唯檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しさうに、吠え立ててゐた。これ等はその時の私の心もちと、不思議な位似つかはしい景色だつた。私の頭の中には言ひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影を落してゐた。私は外套のポケットへぢつと兩手をつつこんだ儘、そこにはひつてゐる夕刊を出して見ようといふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、目の前の停車場がずる〳〵と後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。ところがそれよりも先に、けたゝましい日和下駄の音が改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か言ひ罵る聲と共に、私の乘つてゐる二等室の戸ががらりと開いて十三四の小娘が一人、慌しく中へはひつて來た。と、同時に一つづしり搖れて、徐ろに汽車は動き出した。

小娘は油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある輝だらけの兩頰を氣持の惡い程赤くほてらせた、如何にも田舍者らしい娘だつた。しかも垢じみた萌黃色の毛絲の襟卷がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包があつた。その又包を抱へた霜燒の手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顏だちを好まなかつた。それか

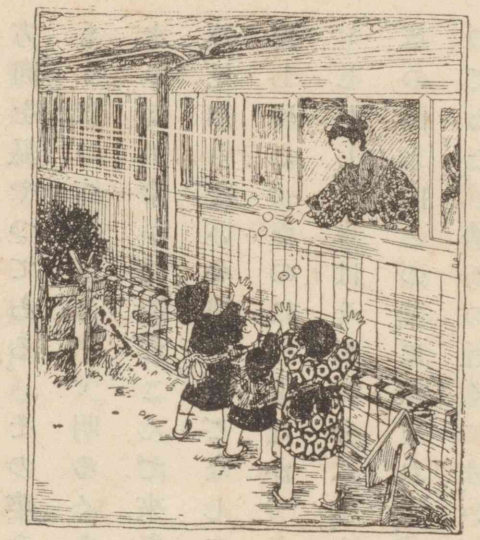
ら彼の女の服裝が不潔なのもやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから卷煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいといふ心持もあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。

それから幾分か過ぎた後であつた、ふと何かに脅されたやうな心もちがして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頰りに窓を開けようとしてゐる。が、重い硝子戸は中々思ふやうにあかないらしい。輝だらけの頰は愈、赤くなつて、時々鼻洟をすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしなく耳へはひつて來る。これは勿論私にも幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし、汽車が今將に隧道の口へさしかゝらうとしてゐる事は、暮色の中に枯草ばかり明る

い兩側の山腹が、間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも係らず、この小娘は、わざ〳〵しめてある窓の戸を下ろさうとする――その理由が私には呑込めなかつた。いや、それが私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜燒の手が硝子戸を下ろさうとして惡戰苦鬪する樣子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の明けようとした硝子戸は、とう〳〵ばたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたやうなどす黑い空氣が、俄に息苦しい煙になつて濛々と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は手巾を顏に當てる暇さへなく、この煙を滿面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかつた。小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戰がせながら、ぢつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る〳〵明るくなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで來なかつたなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし、汽車はその時分には、もうやす〳〵と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山との間に挾まれた、或貧しい町はづれの踏切に通りかゝつてゐた。踏切の近くには、いづれも見すぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみ〳〵と狹苦しく建てこんで、踏切番が振るのであらう、唯一旒のうすい白い旗が懶げに暮色を搖つてゐた。やつと隧道を出たと思ふ――その時の蕭索とした踏切の柵の向うに私は頰の赤い三人

の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆この曇天に押しすくめられたかと思ふ程、揃つて背が低かつた。さうして又この町はづれの陰慘たる風物と同じ様な色の着物を着てゐた。



それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を揚げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一所懸命に迸らせた。するとその瞬間である、窓から半身を乘り出してゐた例の娘が、あの霜燒の手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まつた蜜柑が、凡そ五つ六つ、汽車を見送る子供たちの上へばら〳〵と空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了解した。小娘は、――恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懷に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざ〳〵踏切まで見送に來た弟たちの勞に報いたのである。

暮色を帶びた町はづれの踏切と、小鳥のやうに聲を揚げた三人の子供たちと、さうしてその上に亂落する鮮かな蜜柑の色と――すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、せつない程はつきりと、この光景が燒きつけられた。さうしてそこから或えたいの知れない朗な心もちが湧き上つてくるのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうに小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に歸つて、相變らず輝だらけの頰を萌黃色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる。

「沙羅の花」

一二　寂しき清正

土師清二

大衆文藝作家。本名赤松靜太。大阪朝日新聞記者。

慶長十五年、名古屋城の造營があつた。清正は、萬松寺に宿つて、城普請のために働いてゐた。

天主閣を建てる、その臺石を清正が運ぶことになつた。清正は熱田在に大石があるのを知つて、それを曳出さうとした。數十枚の緋毛氈で、大石を包ませてから、地車に載せ、太い曳綱を付けて先づ三千人ばかりの人夫を

加藤清正

して街道へ曳出させた。

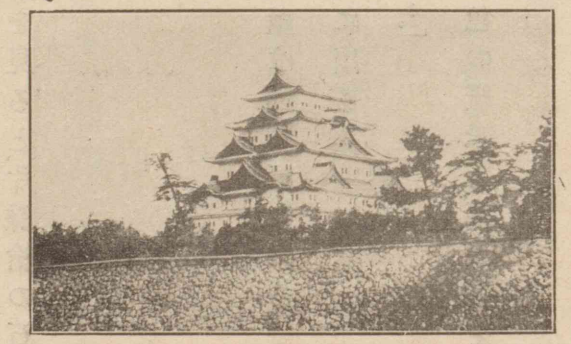
街道のかたはら、松林に張り繞らしてあつた幔幕のところまで曳いて來た時、幔幕はさつと切つて落された。

現れたものはと見ると、目もあやなる兒小姓の一群だつた。綠・赤・黃・白・金・銀、さまざまな裝を凝らした兒小姓の一群である。その眞ん中に、清正は萌黃の大紋に高烏帽子、片鎌の槍を突き、黑地日の丸の大扇を開いて立つてゐる。人夫どもは、兒小姓の美しさ、清正の颯爽たる英姿に打たれて、鳴を鎭め、思はず曳く手を休める。

「いざ、蒐れ！」

清正は大聲叱呼すると、長袴を蹴つて、つつと大石に近づく。兒小姓達はさつとそれに續く。琥珀・珊瑚・金銀の波が、大石を目蒐けて打寄せた美しさ。

清正は、や聲もろとも、大石の上に躍り上る。兒小姓達は、石に取付き、搦め綱に取付いて、我劣らじと先を爭つて、石の上へ、緋毛氈の上へ這上り、躍り上る。琥珀・珊瑚・金銀のしぶきであ



名古屋城

る。

「よう、千之亟は未だか、さ、これに摑まれ。」

清正は上りかねてゐるいたいけな兒小姓を見ると、片鎌槍の石突を、すいと下におろしてやる。

「はい。」千之亟は緊かりとつかまる。

「そうれ、上げるぞ〳〵。」

ぐつと槍を引上げる。銀鱗潑剌として、千之亟は釣上げられる。どつと、一齊に起るどよめき。清正は石の先端に出る。

「そうれい、そうれ、曳け〳〵、やあれ、やんれ……。」

清正は、木遣を唄ひ出した。兒小姓達は、五色の紙采を振り、扇を舞はして、大石の上で調子面白く踊り始める。

石は、ゆるぎ始め、地車はぎり〳〵軋みながら、地ひゞきを尾に引いて、前へ〳〵と進んで行く。清正は唄ひつゞけ、兒小姓は踊りつゞけ

る。その途々に清正の家臣達は、値の高下を問はず、酒肴・果實・菓子の類を買上げ、人夫と言はず見物人と言はず、呑み放題、食ひ次第の大振舞。食ひ醉うた見物人達は、一齊に曳綱に縋つて、えんやら〳〵曳始める。さしもの大石も、萬人を越える人の力で、輕々と動いて行く。

「さあ、おれが音頭ぢや、おれが音頭ぢや。」

見物の中から、踊り出して來たのは、柿色の法衣、白の脚袢手甲といふ若い法師である。食べ醉うたか、足元も覺束ない。法師は、小走に走つて、曳綱の先頭を通り越し、振向くと見ると、もう唄ひ出した。

「やれ、曳け〳〵、やんれ……。」

皆はもう夢中だつた。かうして、大石は無事普請場へ運ばれたのであつた。德川家のための城普請に、木遣を唄つた清正の心、これを苦衷といふか。寂しい清正の姿が目に見えるやうである。

一三　常磐樹

島崎藤村

島崎藤村
詩人、小説家。名は春樹。明治五年長野縣生。

あゝ雄々しきかな傷ましきかな
かの常磐樹の落ちず枯れざる
常磐樹の枯れざるは
百千の草の落つるより
傷ましきかな
其の枝に懸る朝の日
其の幹を運る夕月
など行く旅の迅速なるや
など電の影と馳するや
蝶の舞
花の美

など遊ぶ日の世に短きや
など其の醉の早く醒むるや
蟲草の葉に悲しめば
一時にして既に霜
鳥潮の音に驚けば
一時にして既に雪
木枯高く秋落ちて
自然の色はあせゆけど
大力天を貫きて
坤軸遂に靜息なし
ものみな速くうらがれて
永き寒さも知らぬ間に
汝千歳の時に嘯き

獨し立つは何の力ぞ
白銀の花霏々として
吹雪の煙闇き時
四方は氷に閉されて
江海も音をひそむ時
汝綠の陰も朽ちせず
空を凌ぐは何の力ぞ
立てよ友なき野邊の帝王
ゆゝしく高く立てよ常磐樹
汝の長き春なくば
山の命も老いなんか
汝の深き息なくば
谷の響も絶えなんか

あしたには葉をうつ霙
千草も知らぬ冬の日の
嵐に叫ぶうきなやみ
いづれの日にか
氷は解けて
其の葉の涙
消えんとすらん
あゝよしさらば枝も摧けて
終の色の落ちなん日まで
雲浮かば
無縫の天衣
風立たば
不朽の緒琴

おごそかに
立てよ常磐樹
あら雄々しきかな傷ましきかな
かの常磐樹の落ちず枯れざる
常磐樹の枯れざるは
百千の草の落つるより
傷ましきかな　〔落梅集〕

一四　年始の日記

沼波瓊音

一月二日　雪なり。冬になりて始めて降る雪を初雪と言へど、ともすれば、年改まりて始めて降る雪にも言ふことあり。今日の雪は何れにしても動かぬ初雪なり。朝湯に浴しつゝ雪見と洒落んとて行く。硝子皆湯氣に曇りて、雪も何も見えず。嘗てO君が月下の紅

沼波瓊音
國文學者、俳人。第一高等學校教授。名は武夫。名古屋市の人。昭和二年歿、年五十一。

葉を見んとて瀧の川に行き、歸りて、唯眞黑にて紅葉か何か解らざりきと話されしことを思ひ出す。夜に入りて大いに降る。電車の頭燈に雪の巴と狂ふ樣美し。

瀧の川
東京府北豐島郡の內。

三日　今宵、盆栽の梅一輪開く。

六日　出初式の半鐘、朝靄を破りて響く。牛込に用ありて行く。途にて、電燈會社の工夫、電線に懸りたる紙鳶を取除くに忙しきを見る。是も初春の一仕事なり。

八日　早朝より朝報社に行き、外勤の人三人と共に陸軍始の觀兵式を陪觀に行く。余は總べて儀式といふものに趣味を持たざりしが、今日始めて觀兵式を觀て、天皇の尊嚴の具體的に現されたるを目擊し、一種謂ふべからざる御稜威の韻とも名づくべき感を起し、儀式なるものの重んずべきをつくづくと知りたり。

朝報社
東京市京橋區に在る「萬朝報」を發行する新聞社。

觀兵式
青山練兵場で擧行された。

九日　筒袖の內儀が水道の栓を捻りながら、子供の球を投げ居る

を見て、「金ちやん、又ベース・マーリですか。」

十日　鶯又庭に來る。

十三日　机上の福壽草三つ揃うて開く。愛らしき花なり。名が俗なりとて貶すべからず。

十四日　夕方、須田町にて洋服男一散に電車を追駈け、からりと腰辨當を落す。其の男振返り、暫く「あれは誰が落したのだ。」と言つたやうな態度をして、そして後に急ぎ拾ひ上げて電車に乘れり。此の暫くの態度が、人間の或性情の一部を遺憾無く發露せり。

十六日　藪入なり。晴渡りたる空に、閻魔堂の鐘絶間なく鳴り響く。西洋の日曜の朝はこんなものかと思ふ。

十七日　「N君、筑波會を今度の日曜に遣らうかね。」「えゝと、今度の日曜は何曜に當るだらう。」社中大笑ひ。

十九日　F翁の葬を送る。緩なる葬式の行列に加はりて、ことり

須田町　東京市神田區の内。市街電車の交叉點に當つて常に雜沓を極める。

筑波會　當時知名の俳人の會合。

社中　前に出た朝報社の社員。

ことりと車に搖られて行く時は、無常を感ずるといふにもあらで、或幽玄なる境を彷徨ふ心地するものなり。

二十一日　豪雨降續く。どゝゝといふ音を靜かに聞き居れば、我が身も雨と同じ速度にて限り無く下の方へ落行く心地す。

二十九日　R君來訪。余何時の間にか眠りて、君の歸りしを知らず。正にこれ陸放翁の「須臾客去主人覺、一半西牕無夕陽。」なり。

二月二日　鄕里より海鼠腸到來す。海鼠腸の味は五味以上なり。甘いとか辛いとか云へるものは大したものに非ず。甘い所もあるが、常の甘みに非ず。辛い所もあるが、常の辛みに非ず。それ等の複雜なる味が調和されて、形容し難き味を成せるなり。

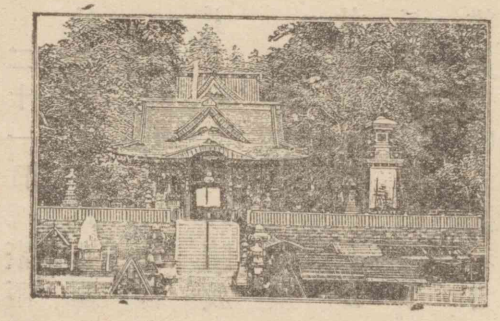
三日　車掌「えゝ、切符の切らない方はありませんか。」職人「おい、お剩錢だ。」と壹圓紙幣を出す。車掌「今出たばかりで、お剩錢がありません、次の停留所で外の電車にお乘換へ下さい。」と、機械が物言ふや

陸放翁　支那宋代の詩人。名は游。

五味　辛・甘・鹹・酸・苦の五つの味。

うに言ふ。職人「面倒くせえこと言やがるねえ。」と尻上りに言つて、紙幣を車掌の鼻の先で振廻す。其の紙幣持つ手が次第に堅い拳になる。其の途端「私、くづして上げませう。」と、手早く財布を取出しては、向側に居たる美しき女學生なりき。

四日　成田不動の豆撒見に行く。日暮れて着。十一時に宿を出で、寺の若者に案内せられ、素足に福草履穿ちて堂に入り、鼠のやうな眞似して、辛く樂人席の下に到る。堂内、人の上に人重なり、堰木の上より人溢れて、人の海に陷れば、人の怒濤は之を弄びて、護摩壇の島に漂着せしむ。其の奇觀、未だ見ぬ人に語りても信ぜざるべし。豆撒式は午前二時頃始まりしが、此處にては「鬼は外。」と言はず、三聲とも「福は内。」と言ふなり。宿に歸りて眠り



成田不動

成田不動寺を新勝寺と云ふ。關東第一の流行佛と云はれる。其の斷食修行と節分會の豆撒の賑とは、殊に世に知られて居る。

しは三時頃なりけん。「日記新文範」

一五　歌御會始拜觀の記

尾上八郎

明治三十九年二月七日、余はおほけなくも九重の御階を上りて、正殿の奥なる御廊下に立てり。片田舍に生れ出でて、ようせずば都をだに知らで過ぐべき身の、如何にして今日の御召には逢ひたりけん。

玻璃の御障子を通して、朝日の影は、麗しう滑らかなる御板敷の上に流れたり。此處は鳳凰の御間とか。此方の欄間、彼方の花瓶、皆其の鳥の形ぞ畫かれたる。黄金の雲を分けて、翼豐かに天つ御空を翔り行く樣、唯大御代の姿さながらにて。

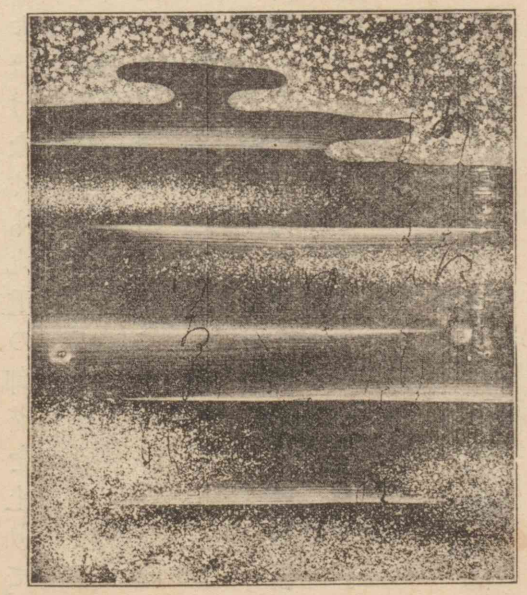
芝生に續きたる御築山に、鶴は一點の雪を印せり。砌近き老梅一樹は、無數の瓊を綴りて、鐵幹御障子の上に横さまにうつろひたり。花も今日をや待ちけんといとをかし。

尾上八郎　國文學者、文學博士。東京女子高等師範學校教授。號は柴舟。明治九年岡山縣生。

御室の内外に備へられたる御椅子の數々、菊の御章、いと鮮かなり。彼方は御座、彼は點者・題者の料、此は讀師・講師・發聲・講頌などの料、それは奉行等の料、御廊下にあるが皇后宮大夫・寄人などの料、次のは我等のなりとか。此方へと導かるるまゝに居寄れば、時正に午前十時三十分。

遙かに物音聞ゆ。「御靴の」と聞くもいと畏し。立上りて、敬禮して待奉る。御音いよゝ近うなりぬ。御室にや入らせ給ふらん。御音絶えぬ。御座にや着かせ給ひし。

頭擡ぐれば、既に御机を前に御椅子に倚らせ給へり。彼方には内



尾上柴舟筆蹟

大臣・侍從武官の君達、皆着き給へり。あはれ、小學校にて御影迎へまつりしは、早二十餘年前。其の時よ、何時か斯くけ近うにとは思ひかけたりし。行幸の折々、人垣の繁みに立隱れて、御車の影仰ぎ奉りしをだに、こよなき身の光榮とは誇らひたりき。あはれ、今日の此のけ近き忝さを何とか言はん。

御式は始まりぬ。讀師の差出す懷紙を受けて、講師は緩に讀出づ。若やかに麗しき聲は水のやうに流れて、端嚴の氣は愈滿渡りぬ。講師讀果つれば、發聲・講頌、諸聲にいと永やかに誦し始む。

先づ乙の調とか、やゝ低けれど、迫らず、弛まず、悠揚たる聲、御空行く雲とや言はん。海に近き流にやたぐへん。あらず。御間に翔れる鳥、其の鳥の鳴く音にぞ通ふらし。

懷紙は幾度か改まりぬ。改まり行くまゝに、調はやう〳〵高うなりぬ。甲に移りしにやあらん　暫くして、東宮の御歌と言ふ聲響き

神の恵のたひらかに年立ちかへる五十鈴川神のめぐみの深きをぞ汲む。

立ちかへるらむ　しづかなる世の年波は神風の五十鈴川より立ちかへるらむ。

出づ。すはとて、立上りて、敬しう耳傾くれば、同じ調も亦改まりたる心地ぞする。「神の恵の」と打上げたる畏さ。誦しまつる身を思ひやるにも、そゞろに涙さへこぼれ出でつ。

二たび返しまつり果つれば、御廊下なる皇后宮大夫席を離れて、御室の内に進み出づ。讀師はやをら立上りて、恭しう近づき寄る。御懐紙賜はらんとてなりけり。

緑と紅とにや、目もあやなる御重懐紙を押伸べつゝ、高やかに誦し上げたる、唯あなめでた、あなたふとととのみ覺えて、髪さへも立上りぬべし。「立ちかへるらむ。」と承るほど、御庭の梅の追風、身に浸渡る心地もしつ。

三たび誦しまつれば、讀師は又進み出づ。こたびは御懐紙を返しまつりて、更に御前に出でて、御製乞ひまつるなり。

御懐紙は賜はりぬ。讀師席に歸りて、打擴ぐれば、講師は恭しう讀出づ。發聲・講頌、亦諸聲に誦し奉る。雍々の音、朗々の響、げに是ぞ泰平のしらべと思ひまつるも現なき心地ぞする。

二たび三たび繰返し奉る程、類少き身なりけりとは思ひ出でつ。まこと、我が父祖は幾人かありし。其の幾人か大御歌の調には觸れし。賤しき身、斯く御前に侍るだにあり。此の御調をうかゞひまつる、辱しとや言はん、畏多しとや言はん、おほけなしとや言はん。如何に言ひてか此の心を表し得ん。光榮か、光榮か。我が知り得たる、學び得たるは、唯此の一言のみ。

高う低う五たび返しまつれば、和氣は御室の外までも溢れ出でて、御間の名の鳥、欄間を離れ、花瓶を離れ、襖を離れて、皆一時にあやの羽交打廣げて舞ひも出でんかと怪しまる。

御披講果てぬ。讀師進みて御懐紙返し奉れば、つと立ちて、御椅子離れさせ給ふ。

我も人も敬しう起上る。御靴の音聞ゆ。御間や出でさせ給ひし、御響遠うなり行く。御廊下や渡らせ給ふと思ひまつる程、御時計は嚴かに十二を打ちぬ。

御階を下りて、車にて御濠のほとりを歸る。顧みれば、御垣の松は響さやかに、大宮の甍は日に輝けり。前の我や夢なる。今の我や現なる。あゝ、御靴の音、あゝ、大御影、あゝ、大御歌。

一六　皇后陛下

下田次郎

下田次郎
女子教育家。文學博士。東京女子高等師範學校教授。明治七年。廣島縣生。

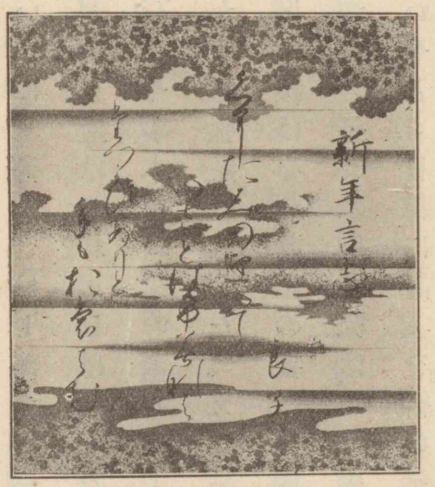
少女でおはした頃

聰明に渡らせられる皇后陛下が、少女でおはした頃の御日常生活は、豐かな藝術的御趣味によつて、實に美しく拜せられた。「まあ何といふ美しいお聲なのでせう。」人々はその澄渡つたソプラノ獨唱のお聲を洩れ聞いては、今更のやうに、それに引きつけられるのであつた。繪畫は學習院時代に木炭畫と水彩繪とをお學びになつたが、その後は大和繪をお描きになつた。お手先の優れて器用で綿密なお方なので、大和繪の纖細な線で、人物や風景畫をお取扱になるのには、いかにも御ふさはしかつた。書にも大層趣味深くあらせられて、お習字を遊ばされぬ日は殆どなかつた。御書風なども、舊い手かきの石摺や手本をお集めになつて、御自身にその長所をお選びになり、飽かず勉強遊ばされた。又講話會などには、いつも御出席になり、御歸邸の後は必ず、講話の要領を周圍の人に御物語り遊ばされるのであつた。是等の御研究は、たゞ少女でおはした頃だけでなく、其の後といへども日毎に課業を御いそしみ遊ばされて、國語・漢文・和歌・佛語などの御進境は、驚かれるばかりであつたと承る。

かうして、御學藝に御多忙であらせられた間にも、體育に深い御注意を拂はせられ、特に庭球では、輕快な御動作をお見せ遊ばされた。

薙刀のお稽古も餘程久しい間の御事で、優しいお姿の姫宮が、輕いお筒袖で、長い柄をひたとお構へになつて、きつとお相手に向はせられ忽ち澄み透る御掛聲で「やつ」と打込ませ給ふ御形、何とも申し上げやうもなかつたと傳へられてゐる。

かうした運動家であらせられたため、箱根その他に成らせられると、お附の人達がこれはと御心配申し上げるやうな山阪をも、眞先にすたすたとお歩きになつた。その頃既に、御身の丈が五尺を越えた完全な健康體であらせられた。



皇后陛下御筆

玲瓏玉のやうな御人格は、その頃の御文章や御歌に由つて、幾多の尊い實例を拜することが出來る。

枯草のひまに生ひたる初若菜
　摘みてさゝげん神の御まへに

此の御歌を拜誦すれば、直ちに敬神の御心を拜察することが出來る。

澁谷の久邇宮御殿の側に、さゝやかなお畑がある。その半は四季の草で滿たされ、半は秋が來れば黃金色の稻が實つた。それもこれも、すべては姫宮がお手づからの御丹精に由るものであつた。そして、姫宮は、この新穀を白木の三方に載せて、あの森の中の神殿に齋き祀つてある皇大神宮の御前に捧げられた。

御自身の事は決して人手を借りずに遊ばされると共に、他人に對する御同情の深くあらせられたことは、數々の御作文に由つても窺ひ奉ることが出來た。「身をつみて人の痛さを知る」と題したもの、又「人の同情心は、境遇によつて深淺の別があると聞く。それならば、自分などは境遇上、自然、同情心が淺いのではあるまいか。それを自分

は恐れる。」といふ意味を、お書き遊ばされた御文章などを拜したものは、何れも有難いことと語り合つた。

かうして少女でおはした頃の陛下の御德の一端を窺ひ參らせただけでも、年頃近侍の人達が、一齊に、「完成せられた美しい御女性。」と讃美し奉つたことの、道理であるのを感じないものはあるまい。

「女子新修身書」

芳賀矢一國文學者、文學博士。東京帝國大學教授。福井市の人。昭和二年歿、年六十

一七　雪

朝ぼらけ有明の月と見るまでに
吉野のさとにふれる白雪

これは、降積んだ雪を、朝戸開けて月と見まがつたのである。降積んだ雪も美しいが、大空を傾けて盛に降りしきる雪景色は、一層美しい眺である。「雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て起つて

芳賀矢一

朝ぼらけ　坂上是則の歌。

徘徊す。」と、白樂天は歌つた。銀砂を散らすやうに、玉屑を降らすやうに、見てゐる中に乾坤すべて一白。氷山峨々たる北國の地では、面白いよりも寧ろ凄じい景色であらうが、我が國の秀麗な山川を降埋める奇觀は、芭蕉翁でなくても、

いざさらば雪見に轉ぶところまで

の感を起すのである。さうはいへ、

駒とめて袖打拂ふ影もなし佐野のわたりの雪のゆふぐれ

には佗しい感がある。「雪の降る日は寒くこそあれ。」雪の風流は冷たいものである。川柳子は、

白樂天　唐の詩人。名は居易。

駒とめて　藤原定家の歌。

雪の降る日
捨てはてて身はなきものと思へども雪の降る日は寒くこそあれ。（西行法師）

雪見には馬鹿と氣のつくところまで

といつた。

安藤冠里は大名で俳句の達人であつた。雪の朝、酒屋の小僧が跣足で街上を往還するのを見て、

雪の日やあれも人の子樽ひろひ

と詠んだ。暖衣飽食、食ふのに魚があり、出るのに輿がある大名の身分として、下を憐むこの心がなくてはならぬ。風流も仁恕の道に合せねばならぬ。

安藤冠里　俳人。磐城國平藩主。名は信友。享保十七年歿、年六十二。

同じく俳人の西島（さいとう）といふ人は、夕方から降りしきる雪の景色の面白さに、いざ雪見に出かけようと、丁稚に供を命じた。西島の妻は、「風流の心のある人には雪見も面白からうが、みやびを知らぬ丁稚の身に取つては、どれほど辛からう。自分の子ならば、よも供には連れられまい。」と言ひながら、

西島　傳不詳。

我が子なら供にはやらじ夜の雪

と詠んだ。西島は手を拍つて、「この名句を得たからには、今日の雪見は十分だ。最早出かけるには及ばぬ。」といつたとは、この妻にしてこの夫、かくてこそ風流の眞意を知つてゐるものといつてよい。

昔、延喜の帝は、雪の降つた寒夜に御衣を脱がせられて、「いさゝか民の苦を思ひやる。」と仰せられた。古事談は、一條天皇にも同じ話を傳へてゐる。この仁慈の行は臣民を感泣させるのに足る。皇后陛下の御歌に、

延喜の帝　第六十代醍醐天皇。

皇后陛下　昭憲皇太后。

綾錦とりかさねても思ふかな
寒さおほはん袖もなき身を

といふのがある。仁愛の御心は同じである。

〔月雪花〕

ジヤンヌーダルク

一八　女性の美

三島章道

三島章道
創作家。子爵。名は通陽。明治三十年東京市生。

女性に限らず、凡て人間の美しさは、其の人の魂が本當に純に其の人の物になり切つて淨化された時に出るやうな氣がします。けれども、女性美といふと、我々は得て外面的の美しさにも考へ及したくなる傾を持ちます。昔からの物語や劇や、又は繪畫にしても、そこに出て來る孝女や貞女や烈女などは、皆それが美人であるやうに描かれて居ます。又美人であることを望みたい氣を持ちます。けれども、本當の女性美は、必ずしも美人に於てだけ見出されるものではないでせう。幾ら美人であつても、其の女の心に卑しいものがあれば、其の卑しさは體の何處かにきつと表れて來ます。又醜い女でも、其の人の心が本當に氣高ければ、其の氣高さはどうしても顏にも體にも表れて、冒すべからざる所が出來ます。

團十郎　九代目市川團十郎。近世の名優。六十歳に及んで時に妙齡の女子に扮した。明治三十六年歿・年六十六。

ジャンヌ-ダルク　フランスの女傑。一四一二―一四三一年。

名優團十郎の晩年は、もう何といつても老人だし、それにそんなに美しい顔でもないから、若い美女などに扮すると、初は一寸美女との感じが起らない。けれども、藝を見て居る内に、次第に美しくなつて來て、しまひには本當に「美女」に見えて了ふ。これは、偉大な藝術の力で美化して了ふからでせう。心と體とも之と同じで、心が美しければ體も美しく見えませう。昔の孝女や貞女や烈女が美人だつたといふのは、美人だと強ひて言つて居るのではなくて、本當にそれが美しく見えた所から言つた言葉も多いのでせう。

ジャンヌ-ダルクなどの行爲から來る美しさは男性的でありますが、彼女が女である所から、女としての美しさも其處に出て來て、潤され輝いて來ることが尙面白いやうにも思へます。そして殊にジャンヌ-ダルクが火あぶりにされた其の瞬間は、どんなに彼女の顏が崇高美に輝いて居たかを想像することが出來ます。本當に純な心で、

或事の爲に命がけになつて、しかと我と我が心を握りしめた時程、其の人の美しさの出る時は無いでせう。それは其の人の魂が緊張し、其の人の人格が映發する美しさです。

女性の美乃至其の崇高美は、古來色々な偉大な藝術家に依つて、深い敬意と愛とを以て色々に描かれて居ます。それに接して感激することが、千萬の理論で女性の美を語るよりも、もつと直接に能く分ることです。「婦人公論」

下田歌子
女子教育家。實踐女學校長。安政三年岐阜縣生。

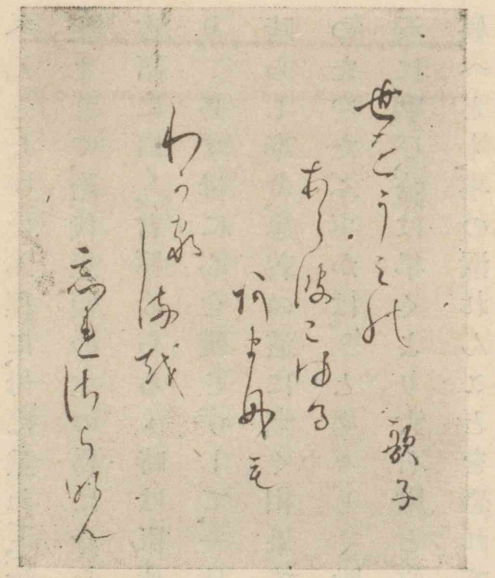
一九　母二篇

下田歌子

一　原總右衛門の母

播州赤穗の城主淺野内匠頭長矩、元祿十四年の春三月勅使下向の際、殿中に於て吉良上野介義央を刃傷に及びける罪科によりて自盡を命ぜられ、采地を沒收せられぬ。此の故に、其の老臣大石内藏助良雄は、原總右衛門元辰等と相謀りて復讎を企てたり。

爾後大石は京都に住し、原は猶留りて赤穗の城下に住し、時々密使を交換し、書狀を以て互の意思を通じたりけるが、一日總右衛門は老母の傍に侍して、さまざまの物語の序に言ひけるは、「此の度餘儀無き用事の出で來て、京都へ上らんと存じ候が、事によりては江戸迄罷り越すやも計り難く、若し左樣の事にも相成り候はば、一月餘りは日を費し申すべし。留守中は定めて御徒然にて、御不自由の程もさこそと推し量り參らすれども、暫時身の暇を賜ひ候へ。」といふ。



下田歌子筆蹟

君辱められるゝ、爲ニ人臣一者、君憂ヒレバシ臣勞、君辱メラルレバス臣死ス。（國語）

母はつく〴〵と我が子の顏を打ちまもり居たりしが、「いや〳〵、汝一度此處を去りて江戸表へ罷り越すならば、よも再びは歸り來らじ。これ今生の別なるべし。」といはるゝに、總右衞門うち驚きて、如何答へんとたゆたふ程に、母は重ねて、「汝驚くこと勿れ。そも武士の家に生まれて、譜代恩顧の主の爲に身を致すは誠に至當の事ならずや。古語に曰く、『君辱められるゝ時は臣死す。』と、忠孝兩全は爲し難き事なり。必ず母に心を殘さずして、一日も早く亡君の爲に修羅の妄執を晴らし奉り、忠義の道に潔く相果てんこそ母のこよなき望なれ。何のたゆたふ事かは。」と男々しく勵ましけるに、總右衞門は覺えず感涙に咽び、「誠は早くより大石殿と心を合せて、內々復讎の支度を整へ候へども、事の漏れんことを恐れて、父母妻子にも語るまじとの神文誓詞を仕り候故に、今日まで母上にも御明し申さざりしを、何卒御免し下されかし。」と言ひければ、母大いに悅びて、急ぎ旅立の用意ども取り整へてぞ出し立てける。

山科　山城國宇治郡。

さて、原は山科なる大石が家に往きて見るに、近き頃より良雄は病床に在りて呻き居たりければ、いたく驚き憂へて、心を盡くして看病しけるに、病は思ひしよりも頓に怠りがたに成りぬ。今は心安しと思ふものから、猶關東へ下らんことは覺束なく、暫時かくて保養あるべきことと、人々いひ合ひけり。總右衞門もげに然るべしと同意して、さらば我も今一度立歸りて母の安否を問ひ來んとて、更に赤穗へ取つて返し、しか〴〵と告げけるに、母も始は何事か打案じ居たるが、漸くに氣色直りて、さらば久々にて諸共に一獻酌まんと、手づから酒肴を調じて、子にも勸め我もまゐりて、宵過ぐる頃までいと心地よげに打語らひて、明日を契りて各臥戸に入りぬ。

かくて、夜明け、日は昇れども母の起きて出で來らざるに、總右衞門いぶかしみて、下婢をして、やをら其の寢所を伺はしめけり。下婢は

寢所に入るや否や、あつと叫びて轉び出でぬ。原驚きて入りて見れば、こはそも如何に、母は、懷劍もて喉をさし貫きて自盡して、うつ伏しに臥し居たり。餘りの事に涙も出でず、騷ぐ心を強ひて押鎭めて、物やあるとあたりを見れば、果して、その枕邊に一封の書あり。披きて讀めば、かくぞ書かれたる。

一筆申殘しまゐらせ候。常々孝心深きことは詞にも述べ盡くし難し。殊更、母の事を思ひて、故鄕へ立歸るなどの心づかひ、我が身にとりては如何ばかり悅び入り候へども、まづ討入といはん時、ふと母の身の上を思ひ出し給ふならば、進む勇氣も忽ち挫けて、敵に內兜を見られ給はんか。これ全く母の存命故と存じ候まゝ、惜しからぬ老の命、今宵先立ち申し候。これも子を愛する道にもあらんと、女心の一筋に思ひきはめたるにて候。此の上は跡に心殘りなく、吉良殿は亡君の仇、母の敵と思ひつめて、討入り給ふものならば、鋭き手柄を致され候はんと安堵致し參らせ候。何事も最期を急ぎ、草々申殘し候。

母

原總右衞門殿

總右衞門は此の遺書を見て、心弱く立歸りしことを後悔すれども、今は何の甲斐あるべきにあらねばと、ます〳〵志を勵まして、直に京に取つて返しぬ。かくて吉良家討入の夜は、比類無き手柄をあらはしけり。

二　ユーゴーの母

西曆一千八百二年の二月、佛蘭西のブザンソン市に呱々の聲を上げたヴィクトル-ユーゴーは如何なる小兒であつたか。身の長は尺に滿たず、頭は非常に大きく、手足は極めて細く小さく、頸の骨は無きが如く軟かで、生れて十五箇月の間は少しも首がすわらず、ぐにやぐ

ユーゴー　フランスの小說家、劇作家。一八〇二―一八八五年。
ブザンソン　フランスの東境に近い一都市。

にやとして、始終胸の方へうなだれて居た。其の不具らしい虚弱な兒が、他日大いに世界に名聲を揚げて、佛蘭西のユーゴーに非ず、ユーゴーの佛蘭西なり。」といはれるに至つたのは、そも誰の力であらう。言ふまでも無く、賢にしてかつ健な母が、不拔の耐忍と精密なる注意とによつて、弱を變じて强となし、蒙を化して賢たらしめたからである。

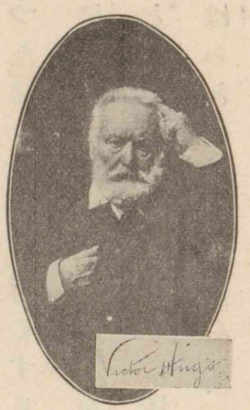
ヴィクトル-ユーゴーの父はジョゼフ-レオポール-ユーゴーといふ人で、早くから軍籍に身を置いたから、彼のナポレオン第一世及び其の弟ジョゼフ-ボナパルトに仕へて少將まで進んだ。當時戰亂の世のことで、此處彼處に出征を命ぜられ、初の程は其の都度家族を携へて往つたが、父も其の煩に耐へず、且種々の困難もあるので、遂に巴里に止めて、子供の教育は母の手に一任することとした。然るにユーゴーの母は賢明で且膽力のあること、殆ど丈夫も及ばぬ程であつたから、ユーゴーと二人の兄とを撫育して到らざる所無く、訓誡實に其の當を得た。

ユーゴーの母は子を教ふること嚴正で、其の命令が能く子供に行はれた。一二の例證を示せば、次のやうな事があつた。ユーゴーが七八歳の頃、其の後園に多くの果物がなつて居たが、母は子供に誡めて、一つでも母の許を得なければ採ることはならぬと命じたので、ユーゴーは或日、「母樣、あの果物が若し能く熟して落ちて居ても取つてはいけませんか。」と聞いた。母は直に「勿論。」と答へた。ユーゴーは重ねて、「それなら落ちて腐つてしまつても、取つてはいけませんか。」と問ふと、母は又同じやうに答へた。それ故、果物の落ちて腐敗したのが澤山あつたが、誰も拾ふ者は無かつた。

又隣家へ、テランドといふ天文學者が引越して來て、隣に男の兒が許多居るのを見て、庭にはひつて來て騷がれては迷惑だからとて、隔

の垣を作らうとした。するとユーゴーの母は、「其の儀ならば御心配には及びません。『お隣の庭へ行つてはならぬ。』と申しつけますから。」と言つた。其の時テランドの心の中では、「さうはいふものの頑是無い子供の事だから、おぼつかないものだ。」と思つて居た。然るに爾後幾月立つても、此のテランドの庭内には、小さい靴の跡は一つも附かなかつた。

ユーゴーの母は幼い子供を携へて、西班牙から巴里に還つて棲んだが、其の家は、庭園も廣く、種々の草木が榮えて、四時をり〳〵に花咲き實を結ぶ一小天地の樂園で、母子は世界の兵塵をも餘所にして、茲に平和の春を樂しんで居た。然し其の當時の教育界には、智德の必要を說く風が盛で、まだ體育の方に注意を向ける者が尠かつたにも拘らず、賢い母は、さま〴〵の方法を以て子供の體力の增進を圖つた。又ユーゴーに文學の天才があるのを見て、之に教へていふには、「御前は文學で生活の道を立てようとは思ふな。生活の道は外に講じなければならぬ。それでなくては、とても眞に高尙な文學者となることは出來ないぞ。」と教へた。子供には園藝・大工、又は他の手工學を正課の外に修めしめて、專ら自立の精神を養成することに努めたのである。



ヴィクトル・ユーゴー

一千八百十七年、佛國學士會院で、題を設けて懸賞の詩を募つた時、ヴィクトル・ユーゴーは十五歲であつたが、此の募集に應じて最優等の選に入つた。

其の後、母は肺炎衝に罹つて病床に呻吟して居たので、子供は日夜其の傍を去らず、心を盡くして看護した。此の時もユーゴーは或懸賞募集に應じて、一詩を送らうとしてゐたのであつたが、母の大患に遭つたので、看護に追はれて、其の方に心を移す暇が無かつた。けれ

ども母は此の大病中も、ユーゴーの詩を見るのを樂しんで居たので一日母はユーゴーに、「此の間應募しようといつた詩はもう出來たか。」と問うた。ユーゴーは、「まだ作りません。」と答へると、母は、「いくら臨時の用が出來ても、詩を止めるやうな事ではいけない。勉めて早く作つたらよからう。」と輕く誡めたが、さも〳〵失望らしい樣子であつた。それから暫くすると、母はすや〳〵と睡に就いたので其の間にユーゴーは忽ち鉛筆を取つて急作の詩を書いて、其の紙片をそつと睡つて居る母の手に置いた。母は睡から覺めて、之を讀んで、はらはらと落涙して喜んだ。

此の母の熱涙に濕うた詩篇は、其の時の應募詩中の最優等たる名譽を得た。

母は遂に起つこと能はずして、愛兒が孝行な看護の手から離れて、不歸の旅人となつてしまつたけれども、佛蘭西の文豪ヴィクトル・ユーゴーの名は、此の母の丹誠によつて、永く世界に傳はる事になつたのである。「良妻と賢母」

井上康文
詩人。名は康治。明治三十年神奈川縣生。

二〇　鐘樓守

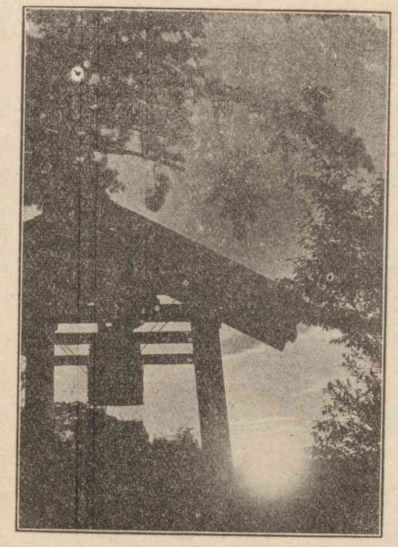
小さな街の、
鐘樓を守つて、
老いたる夫婦は、
何十年か
何百時か
人々に時を告げた。
風の夜も、
闇の夜も
鐘の音は

井上康文

空にひゞきわたる。

晴れた蒼空に、
星きらめく夜空に、
光とともに
時は告げられる。

人々は働く、
親と子の愛に働く。
人々は眠る、
團欒のうちに
暖かき蒲團にねむる。
しかもそのとき



老いたる鐘樓守夫婦は、
街の人々のために
世界のために時を告げる。

おゝ、いま鐘が鳴る、
小さな街の空に、
人々の心の底に、
世界の果てにひゞきわたる。

「日本現代名詩集」

二一　楠氏三篇

一　櫻井の宿

尊氏卿、直義朝臣大勢を率して上洛の間、要害の地に於て防ぎ戰はんため兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣早馬を進めて内裏に奏聞あり

主上　後醍醐天皇。

山門　比叡山延暦寺

河尻　淀川の口。

ければ、主上大いに御騒ぎあつて、楠木判官正成を召されて、「急ぎ兵庫へ罷下り、義貞に力を合せて合戰を致すべし。」と仰せ下されければ、正成畏つて奏しけるは、「尊氏卿已に筑紫九國の勢を率して上洛候なれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候らん。御方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乘つたる大勢にかけあつて、尋常の如くに合戰を致し候はば、御方決定打負け候ひぬと覺え候なれば、新田殿をも唯京都へ召し候うて、前の如く山門へ臨幸成り候べし。正成も河内へ罷下り候うて、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵粮を疲らし候ほどならば、敵は次第に疲れて落下り、御方は日々に隨つて馳集り候べし。其の時に當つて、新田殿は山門より推寄せられ、正成は搦手にて攻上せ候はば、朝敵を一戰に滅ぼすことありぬと覺え候。新田殿も定めて此の料簡を存じ候らんなれども、路次にて一軍もせざらんは、無下に言甲斐なく人の思はんずる所を恥ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戰はとてもかくても始終の勝こそ肝要にて候へ。能く〳〵遠慮を廻らされて、公義を定めらるべきにて候。」と申しければ、誠に軍旅のことは兵に讓られよ。」と、諸卿僉議ありけるに、重ねて坊門宰相清忠申されけるは、「正成が申す所も其の謂はれありと雖も、征伐の爲に差下されたる節度使、未だ戰を爲さざる前に、帝都を捨てて一年の内に二度まで山門へ臨幸あらんこと、且は帝位の輕きに似、且は官軍の道を失ふ所なり。縱令尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を順へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ

清忠　藤原氏。

戰の始より敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度大敵を攻靡けずといふことなし。是全く武略の勝れたる所にあらず。只聖運の天に叶へる故なり。然れば只戰を帝都の外に決して、斧鉞の下に滅ぼさんこと、何の子細かあるべきなれば、只時を替へず正成下さるべし。」と申されければ、主上げにもと思召して、重ねて「正成罷下るべし。」とぞ仰せ出されける。正成「此の上はさのみ異議を申すに及ばず。」とて五月十六日に都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。

五月十六日　延元元年。

櫻井の宿　攝津三島郡島本村の内。木津川の淀川に會する邊にある。

正成是を最期の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて庭訓を殘しけるは、「獅子子を產んで三日を經る時、數千丈の石壁より之を擲ぐ。其の子獅子の機分あれば、教へざるに中より跳返りて死することを得ずと言へり。況や汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に

留まらば、我が教誡に違ふこと勿れ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見んこと、之を限と思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りといへども、一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失ひて降人に出づることあるべからず。一族若黨の一人も死殘つてあらん程は、金剛山の邊に引籠つて、敵寄來らば、命を養由が矢先に懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と泣く〳〵申し含めて、各、東西へ別れにけり。

養由　楚有養由基者、善射者也。去柳葉百步而射之、百發百中之。（淮南子）

紀信　漢將。楚の項羽を欺きて高祖を脫せしめ、羽のために燒殺された。

二　母の教訓

其の後、尊氏卿楠木が首を召されて、「朝家、私、日久しく相馴れし舊好の程も不便なり。跡の妻子ども、今一度空しき貌をもさこそ見たく思ふらめ。」とて、遺跡へ送られける情の程こそ有難けれ。楠木が後室・子息正行之を見て、判官今度兵庫へ立ちし時、樣々申し置きし事共

多かる上、今度の合戰に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出でしを限の別なりとは豫てより思ひ儲けたる事なれども、貌を見ればそれながら、目塞がり色變じて、替り果てたる首を見るに、悲の心胸に滿ちて、歎の泪せきあへず。今年十一歳になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有樣、母が歎の詮方も無げなる樣を見て、流るゝ泪を袖に抑へて、持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて、則ち妻戸の方より行きて見れば、父が兵庫へ向ふ時、形見に留めし菊水の刀を右の手に拔持つて、袴の腰を押下げて、自害をせんとぞし居たりける。母急ぎ走り寄つて、正行が小腕に取付いて、泪を流して申しけるは、『栴檀は二葉より芳し。』と言へり。汝幼くとも、父が子ならば是程の理に迷ふべしや。幼心にも能く〳〵事の樣を思うて見よかし。故判官が兵庫へ向はれし時、汝を櫻井の宿より還し留めしことは、全く跡を弔はん爲にあらず、腹を切れとて殘し置きしにもあらず。『我

後室　名は久子。或は滋子とも云ふ。備前守正源忠の妹。正行の後甘薙の領内髮を剃て南庵と號し、細川住草庵に結んだ。楠氏の庵である。がこれで正行の死れた後十六年目の正平十九年歿。

栴檀は古諺。

たとひ運命盡きて戰場に命を失ふとも、君何處にも御座ありと承らば、死殘りたらん一族若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅ぼして、君を御代にも立て參らせよ。』と言置きし所なり。其の遺言具さに聞きて我にも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや。斯くては父が名を失ひ果て、君の御用に合ひ參らせんことあるべしとも覺えず。」と泣く〳〵諫め止めて、拔いたる刀を奪ひ取れば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣倒れ、母と共にぞ歎きける。

禮盤　佛前の高座。

其の後よりは、正行父の遺言・母の教訓、心に染み肝に銘じつゝ、或時は童共を打倒し、頭を取る眞似をして、「是は朝敵の頸を取るなり」と言ひ、或時は竹馬に鞭を當てて、「是は將軍を追つ懸け奉る。」なんど言ひて、果敢なき手ずさみに至るまでも、只此のことをのみ業とせる心の中こそ恐ろしけれ。

三　如意輪堂

阿部野　攝津東成郡にある。天王寺以南住吉に至る一帶の沙丘。

霜月二十六日　正平二年。

渡邊の橋　今の大阪市天神橋の東にあつたといふ。

四條縄手　河内中河内郡枚岡南村大字四條の野。

兩度の合戰　正行が尊氏の將細川顯氏・山名時氏を破つたのを云ふ。

將軍・佐兵衛督　足利尊氏、と

阿部野の合戰は霜月二十六日のことなれば、渡邊の橋より堰落されて流るゝ兵五百餘人、甲斐無き命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱更へさせて身を溫め、藥を與へて創を療せしむ。斯くの如く四五日勞はりて、馬に乘る者には馬を引き、物の具失へる人には物の具を着せて、爲代してぞ送りける。されば敵ながら其の情を感ずる人は、今日より後心を通ぜんことを思ひ、其の恩を報ぜんとする人は、軈て彼の手に屬して、四條縄手の合戰に討死をぞしける。

さても、今年兩度の合戰に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍・左兵衛督の周章、唯熱湯にて手を濯ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直・越後守師泰兄弟を

直義と。

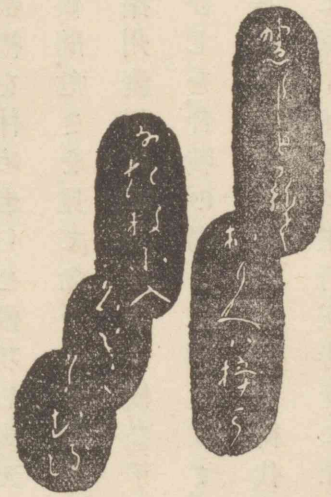
十二月二十七日　正平二年。

兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行・舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日、吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、『父正成尪弱の身を以て大敵の威を碎き、先帝の宸襟を休め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依りて、遂に攝州湊川にて討死仕り候ひ了んぬ。其の時、正行十一歳に罷成り候ひしを、合戰の場には伴なはで、河内へ歸し、『死殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡ぼし、君を御代に卽け參らせよ。』と申し置きて死にて候。然るに、正行・正時既に壯年に及び候ひぬ。此の度我と手を碎き合戰仕り候はずば、且は父の申しし遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落つべく覺え候。されば、今度師直・師泰に駈合ひ、身命を盡くし合戰仕りて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行・正時が

首を彼等に取られ候か、其の二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度龍顏を拜し奉らん爲に、參內仕りて候」と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心其の氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる前に、先づ直衣の袖をぞ濡らされける。

主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顏殊に麗しく諸卒を照臨あり。正行を近く召して、以前兩度の戰に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返す〳〵も神妙なり。大敵今勢を盡くして向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずることは、勇士の心とする所、進むべきを知りて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後



主上
後村上天皇。

先皇
後醍醐天皇。

太平記
後醍醐天皇以後、南北朝戰亂の次第を敍した軍記物語。室町時代に小島法師の作と傳へられてゐる。

を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。愼みて命を全うすべし。」と仰せ出さる。正行頭を地に着け、兎角の勅答に及ばず、唯是を最期の參內なりと思ひ定めて退出す。

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞以下、今度の軍に一足も引かず、一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各〻名字を過去帳に書連ねて、其の奧に、

かへらじとかねて思へば梓弓
なき數に入る名をぞとゞむる

と、一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、おの〳〵鬢髮を剪りて佛殿に投入れ、其の日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。「太平記」

豐島與志雄
小說家。明治二十三年福岡縣生。

二二　梅花の氣品

豐島與志雄

梅花の感じは氣品の感じである。

氣品は一の芳香である。目にも見えず耳にも聞えない或風格から發する香である。甘くも酸くも辛くもなく、其らのあらゆる刺激を超越した、えもいへぬ香である。人をして思はず鼻孔を膨らませる無味無臭の香である。それと明らかに捉へることは出來ないが、それと明らかに感じ識られる一種獨得の香である。何故にともなく、どこからともなく、どこへともなく、おのづから發散して漂つてゐる浮游の香である。

これはまた梅花の香である。うつすらと霧の罩めてゐる未明の微光に、或は淋しい冬の日の明るみに、或は佗しい夕の靄に、或は冷々とした夜氣に、仄かに織込まれて、捉へがたく觸れがたく、たゞ脈々と漂つてゐる一種獨得の梅花の香は、俗塵を絶した氣品の香である。その香を感じてその花を求めるのは、俗であり愚である。花のありかを求めないで、漂つて來る芳香に心を澄す時、氣品の本體を識ることが出來る。

氣品はまた一の凛乎たる氣魄である。衆に媚びず、孤獨を恐れず、己の力によつて自ら立ち、驕らず、卑下せず、霜雪の寒さにも自若として己自身に微笑みかける搖ぎのない氣魄である。肥大でなく、矮小でなく、膨脹せず、萎縮せず、賑やかでなく、淋しくなく、たゞあるがまゝに充ち滿ちて、空疎を知らず、漲溢を知らず、恐れることがなく、蔑むことのない清爽たる氣魄である。

これはまた梅花の氣魄である。霜雪の寒さを凌ぎ、自らの力で花を開き、春に魁して微笑み、しかも驕ることなく、卑下することなく、爛漫たる賑やかさもなく、荒涼たる淋しさもなく、たゞ靜かに己の分を

守つて、寒空に芳香を漂はしてゐる梅花の姿は、氣品そのものの氣魄である。しみ〴〵と梅花に見入ると、恐怖や蔑視や悲哀や歡喜など、すべて心を亂すやうな情緒は靜まつて、たゞ氣高い氣品の氣魄に打たれるであらう。

氣品はそれ自身の性質からして淸淨であり白色であるべきである。赤や靑や黃など、何等かの色に染められた氣品は世に存しない。もとより赤や靑や黃や紫など、さういふ色彩が持つことの出來る氣品はあるけれども、氣品そのものの色はどこまでも白色である。しかし、單に白色だけでは足りない。純白の氣分を破らない程度に於て、何等かの點彩を要する。鮮かな一點の色彩を包んだ純白、それが氣品の色である。

これはまた梅花の色である。黎明や薄暮の微光の中に浮出す灰赤いまでの白色、白晝の外光や深夜の闇の中に浮出す灰蒼いまでの

白色、また月光に照し出される薄紫にまがふまでの白色、その白色の花瓣の中に花粉の黃を小さく點出した色彩は、氣品そのものの色彩である。これに瞳を凝らす時、おのづから心がすが〴〵しくなつて、氣品の妙趣を悟ることが出來る。

氣品には一の澁味があり、しかも同時に一の新鮮味がある。氣品は舊陋でもなく新奇でもない。純粹の氣品は、骨董と新考案とを包含し、兩者を調和したものである。老と若と舊と新とを寄せ集めて、しかもそのどれでもなく、老と舊との澁味を取り、若と新との新鮮味を取つた一種恆久的のものである。古さから來る佶屈聱牙と、新しさから來る自由暢達と、この兩者を具有して、しつくりと落着いたものである。

これはまた梅花の落着である。鋭角度をなしてぐい〴〵と曲つた古木から、すい〴〵と若芽を伸ばし、若きを育てる力を內に藏した

老幹と、老を生かせる力で伸上る若枝とが、しつくりと一つの氣分に纏まつて、苔の生えた古い樹皮と、艶々しい新たな樹皮とが、一樣に花を開いてゐるのは、正に氣品そのものの姿である。老いた枝にも若い枝にも、一樣に咲匂つてゐる梅花を眺めると、輕佻と鈍重とを超越した氣品の沈靜に味到することが出來る。

氣品はこの世には稀である。それは地上のものといふよりも、むしろ多く天上のものであるからである。地上ではその本來の面目を汚されるといふのではないが、そこに在るのにはあまりにそれが清らか過ぎる。しかし、それを地上に引下して己の所有としたところに、人の魂の朗かさがある。地上から天上へと人の魂が架け渡した多くの橋梁の中の一つが、そこにあるともいふことが出來る。それゆゑ、氣品はどんな人にも親しまれ易い。

梅花の感じは氣品の感じである。けれども、梅花は一の抽象でなくて、一の具象である。隨つて人に親しまれ難い。あまりに芳しい香を漂はせ、あまりに凜乎たる氣魄を示し、あまりに清らかな色彩を有し、あまりに妙味のある樹に咲くので、人間ばなれのした感じを以て人を卻けがちである。しかし、梅花に瞳を定め、その香に心を澄すことは、必ずしも詩人にとつてばかりでなく、普通の人にとつてもよい。なぜかといふに、それは地上の息吹に天上の息吹を交へることだからである。梅花には人間味が少いから、新たな心を以て梅花に接し、新たな心を以て梅花に親しむことは、人間にとつて益よい。この意味に於て、眞に梅花を觀るのには、雜沓の巷や、廣い梅林や、人工的な盆栽や、または月明の夜などに於てよりも、むしろ自由な晴れ〴〵とした境地に於てするがよい。必ずしも美景を要しないが、たゞ自然の風趣の害せられてゐない伸びやかな環境の中に、一本の老木が、自然のまゝの枝ぶりに、ぽつり〳〵と花を着け、仄かな香を漂はして

ゐるのを、少し冷かな二月の夜明、薄霧の晴れやらぬ頃、爽かな空氣を吸ひ、小さな霜柱を踏んで、ふと氣づいたまゝ、何氣なく足を止めてしみじみと見入り嗅入る心持、それこそ眞に梅花を觀る境地である。その一本の老樹のたゝずまひと、その清らかな花の姿と、その脈々たる香と、その清冷な早朝の空氣とは、ともに梅花の氣品となつて、人の心に沁通るであらう。これをも卑俗といふのは、卑俗ばかりを知つて高潔を知らぬからである。

二三　さわやかな心

河野省三

河野省三　國學院大學教授。

日本人の民族性の本質的なものとして、私は先づ純眞性を擧げたい。實に此の純眞性が、國民のあらゆる性情になつて現れてゐるのである。

日本の美と日本人の美とを象徴してゐるものは富士山であり、櫻花であり、清い月であり、綠の松である。或は森の中に隱見する神社であり、軒端に飜る日の丸の國旗であり、小屋に天地を觀ずる茶の湯である。清けさと優しみと單純さと――一言にしていへば純眞性の溢れた所に、まことの大和心が見られるのである。本居宣長が「敷島のやまと心を人問はば朝日に匂ふ山ざくら花。」と詠んだのは正しく千古の絶唱である。此のいやみとか毒々しさとかいふものの無い、日本人の本性を見出すことが思想問題の根本である。

明治天皇の御製に「さしのぼる朝日のごとくさわやかに持たまほしきは心なりけり。」といふ一首があるが、かの「淺みどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな。」といふ御製と共に、遺憾なく我が純眞性を表現せられてゐると思ふ。此の朝日が豐榮昇るときのやうな、晴々と爽快な、而して生々とした氣分が卽ち大和心の眞髓である。此のさわやかな心こそ、我等の祖先が道德性の本質として

考へてゐた明く淨く正しく直き誠、卽ちまごころに外ならない。神道の本質も、此のさわやかな心を反省し磨き上げて、明・淨・直の生活を營み、我が國體を尊重し、我が歷史を重んじ、此の人生を樂しみ、此の文化を悅ぶのである。

此の心の働きは神ながらであり、自然であり、大らかであり、雅であり、單純である。從つて神道にはせゝこましい窮屈な教理がない。古事記その他の古典は、固より神道の經典として價値を持つてゐる。併し、神道の最も尊い經典は皇室であり、國體であり、神社であるといふべきである。さわやかな心を以つて之を尊重し、一家を愛し、生活を樂しむ所に神道の教理の基礎がある。此處から囚はれない宗教的情操が湧いて出るのである。

神道は何を以て生命とするか。云ふまでもなく皇祖天照大神の生成化育の神德を發揚するに在る。有らゆる物を創造し、之を成長させ、而して各、その本性のまゝに發育を遂げしめるのが天照大神の神德である。此の神德を發揚し、顯現する爲に、皇室と國家と國民との不離一體の活動が必要條件となるのである。茲に日本人の國民生活の規範がある。此の規範の具體化したものが帝國憲法であり、教育勅語である。それは正に皇祖皇宗の遺訓であり、祖先の遺風である。それ故に神道は日本人の傳統的信念である。

神道は日本人の傳統的信念であるから、其の民族性の特色を具現したさわやかな心を以て其の本質としてゐるのである。從つて神道に育まれた凡ての日本人は、さわやかな心を修養して、生活を純化し、社會を美化してゆかねばならぬ。換言すれば、快活な眞面目な態度を以て、日常生活を營み、虛僞を去り、醜惡を祓つて、心を磨かなければならぬ。かくして私たちは、さわやかな心の持主たる眞の日本人の本然の姿を認めることが出來ようと思ふ。

小野清一郎
東京帝國大學教授。

二四　文化の意義

小野清一郎

近頃文化生活といへば、一般に安易快適な生活樣式の意味に解されてゐるやうである。殊に西洋の生活樣式を採入れることが、今日の文化生活なのである。勿論採入れるといふことは、必ずしも直譯的に模倣することではない。其の長所を採つて、我が邦の生活樣式に應用すること、或は一面からいへば、我々の生活樣式を西洋流のそれに應化させてゆくことであらう。さういふ意味に於て、私は文化生活に反對するものでないのみならず、相當の努力を是に用ひることを辭せないものである。

けれども、私は右のやうな意味に於ける文化生活を以て文化の第一義的な意味であるとは認めない。私は所謂文化生活の提唱及び運動に對して相當の意味を認めるのであるが、又一方に於て文化といふ言葉が、しかく卑近に、しかく功利的に、しかく安價に用ひられることについて、一種の滑稽とまた不滿とをさへも感ずることを禁じ得ないものである。私共は文化の意義について、もう少し深く反省する必要がないであらうか。

私は茲に文化の意義について特別の研究を試みようといふのではない。唯私だけの考を述べるに過ぎないのである。私は文化とは人類の力に依る人類の理想の實現をいふべきであると思ふ。人類の力に依らざるものは文化でない。同時に人類の理想を實現せざるものは文化でない。私はさう考へるのである。

人類が其の力を發展させるには社會的協力が必要であるから、文化は社會的なものである。また文化は人類の力の發展であるから、其の本質に於て創造的なものでなければならぬ。社會的、創造的といふことが、文化の第一の意義である。

さて、自由なる人類の理想そのものは、いろ〳〵の方面にいろ〳〵の形をとつて現れる。之を人類の理想であるといふ點から觀れば、皆悉く平等で、其の間に差等あるべきでない。日常の極めて個人的な享樂と雖も、私は決してそれを無意味なものとは考へぬのである。けれども我々の理想は決して其處に止まるものではない。更に高く、更に遠い理想があるべきである。若しも物質的生活の快適以上に理想を求めない人があれば、それは悲しむべきことである。なぜなれば、其の人は未だ體驗し得べき眞の理想を體驗して居らぬからである。眞の文化生活者は、人類の眞の理想の體驗を基礎としなければならぬ。日常生活の快適以上の理想に目ざめることでなければならぬ。我々にして偏に安易快適を追求する限り、其の安易快適そのものが、亦容易に來るべきでない。

語を換へていへば、眞の文化生活は享樂の生活に非ずして創造の生活であるべきである。私が所謂文化生活の提唱に相當の意味を認めつゝ之にあきたらざる所以のものは、其の現實的享樂の追求に傾いてゐることである。これは深い人性に根ざす高き理想を忘れんとする危險がないとはいへない。此の點からして私は文化生活の提唱が更に深化することを希望するものである。

「佛教と現代思想」

二五　日本

徳富健次郎

一

日本に生れた事を感謝する。空恐ろしくも思ふ。

どう思ひ直しても、うぬ惚ではなかつた、事實である。日本は皇天の祕藏子だ。

世界の地理・歴史から日本の地理・歴史に還つて見れば見る程、私は天の意匠の指痕を鮮かに讀む。世界の爲に日本を育つべく、天はど

徳富健次郎　小説家。號は蘆花。熊本縣の人。昭和二年歿、年六十。

れ程面倒を見たことか。父の嚴、母の慈、あらゆる手を盡くして日本は今日の今日まで育てられた。勿體ない大御親の心盡に、私は感激せずに居られぬ。

否でも應でも、日本は天の愛子だ。

二

世界地圖に見る日本の小ささよ。小さいが當然。種子は小さい。核は小さい。要は小さい。

私は曾て歌つた。

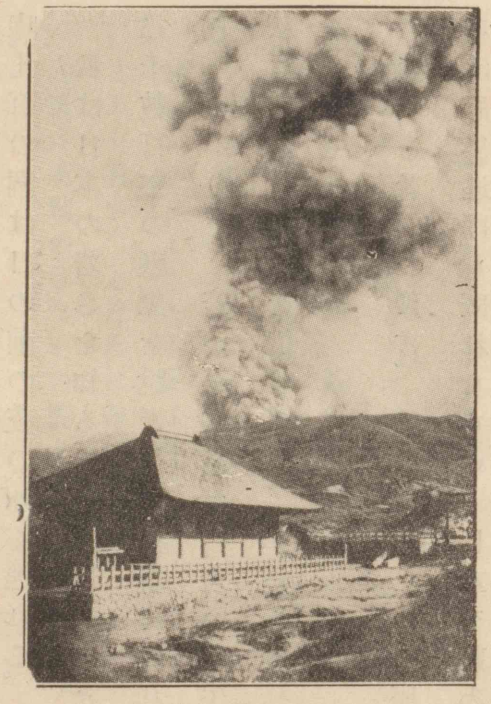
日輪は見る目に小なれど光世界を照らし
日本は地圖に小なれど志四海を懷く

世界の何處に日を旗章にする邦があるか。

自ら日本を名のつた時に、日を旗章と定めた日に、日本の位置と天職とは夙くに定まつて居た。

三

世間見ずであつてはならない。だから明治維新の初、大いに「知識を世界に求め」たのだ。私は日本の貧しさを知つて居る。古今東西あらゆる優秀なものが、日本に無くて他の兄弟の國にある。愛によつて私はそれをわが有にした。またしようとして居る。愛する者はすべてを有する。



阿蘇山

私は日本人の病を知つて居る。日本人の私は、うんざりする程其の病を持つてゐる。しかし私は失望せぬ。私を支配するものは瑞々しい生命だ。私の衷

富士を一夜に　孝靈天皇の五年、富士山が一夜にして現出したとの傳說。

に火が燃える。曾て富士を一夜に聳えさせ、今も阿蘇・淺間を煙らす火、恆に新な創造の火、それが私の衷に燃える、私が身ぶるひして起つ時、凡百の病は日の前の夜の如く逃れる。

私は日本の若さを知る。私は若い。きまりが惡い程若く幼い。二千數百年の歷史を脫ぎ、明治維新に生れかへつてやつと半世紀過ぎたばかりだ。若いが當然だ。若いが生命だ。生命は成長する。私は日本の前途を信ずる。

四

應ずる者への豫言。就く者のための座。負ふ者の使命。自覺だ。私は最早逃げも匿れもせぬ。日本を將ゐていさぎよく定められた天の愛子の座に就く。「太平洋を中心にして」

自修文

一　レーミ　ゼラブル

豐島與志雄譯

レーミゼラブル　フランスの文豪ユーゴーの傑作小說。哀史、噫無情などと譯れてゐる。

豐島與志雄　小說家。明治二十三年福岡縣生。ビヤンヴニュ又ミリエル司敎。レーミゼラブルの主人公ジヤン・ヴアルジヤンに精神的感化を與へる人。

翌朝、日の出る頃、ビヤンヴニュ閣下は庭を步いてゐた。マグロアール婦は全く狼狽して彼の所へ駈けて來た。

「旦那樣旦那樣」と彼女は叫んだ。「銀の器の籠は何處に在るか御存じでいらつしやいますか。」

「知つてゐるよ。」と司敎は言つた。

「まあ有難い。」と彼女は答へた。「私はまたどうなつたかと思ひました。」

司敎は花壇の中でその籠を拾つた所であつた。彼はそれをマグロアール婦に差出した。

「こゝに在るよ。」

「え？」と彼女は言つた。「中には何にもないではございませんか。銀の器は？」

「あゝさう、」と司敎は言つた。「お前が心配してゐるのは銀の器だつたのか。それは何處に在るか私も知らない。」

「まあ何といふことでせう。盜まれたんでございますよ。昨晩のあの男が盜んだのでございますよ、きつと。」

すぐに、元氣のよい老婦マグロアールは、勢を込めて禮拜所へかけてゆき、寢所にはひり、そしてまた司敎の所へ戻つて來た。司敎は身を屈めて、籠が花壇に落ちた時に折られたギーヨンのコクレアリアの草花を歎息しながら眺めてゐた。彼はマグロアール婦の聲に身を起した。

「旦那樣、あの男は逃げてしまひました。銀の器は盜まれたのです。」

さう叫びながら彼女の眼は、庭の隅に落ちた。其處には壁を乘越した跡が見えてゐた。壁の屋根の垂木が取れてゐた。

「もし、あそこから逃げたのです。コシュフィレ通へ飛越したのです。まあ惡い奴。銀の器を盜んだのでございますよ。」

司敎は一寸默つてゐた。それから眞面目な眼を擧げて、穩かにマグロアール婦に言つた。

ギーヨン　フランスの地名。

コクレアリア　洋種のわさび。

「が第一に、あの銀の食器は私共のものであつたかね。」

マグロアール婦は茫然としてしまつた。しばし沈默が續いて、それから司敎は續けた。

「マグロアールや、私は誤つて永い間あの銀の器を私してゐた。あれは貧しい人達の物なんだ。所であの男は何であつたらう。明らかに一人の貧しい人だつたではないか。」

「まあ何を仰います！」とマグロアール婦は言つた。「何も私や孃樣のためではございません。私共にはどうだつて構ひません。けれど、それは旦那樣のためでございます。これから旦那樣は何で御食事をなさいます。」

司敎は驚いたやうな風で彼女を見た。

「あゝそんなことなら。錫の器があるだらう。」

マグロアール婦は肩を聳かした。

「錫は臭がいたします。」

「では鐵の器は。」

マグロアール婦は意味深く顏を顰めた。

ジャン-ヴァルジャン　ミゼラブルの主人公。
妹　司教の妹バチスチヌ。

「鐵は妙な味がいたします。」

「それでは、」と司教は言つた、「木の器がいゝ。」

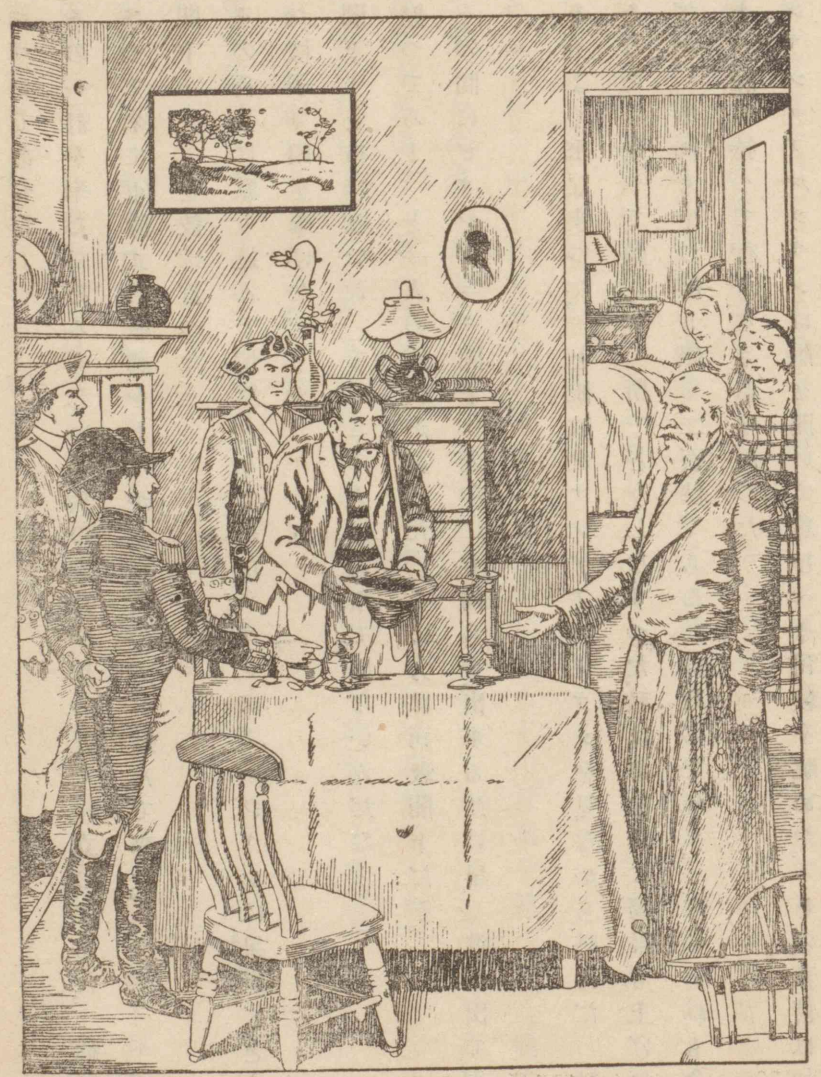
數分間後には、彼は前夜ジャン-ヴァルジャンが坐つてゐたその食卓で朝食をした。食事をしながらビヤンヴニュ閣下は、何も言はない妹と、何かぶつぶつ不平を言つてゐるマグロアール婦とに、パンの切に牛乳をつけるためには、匙も肉叉(フォーク)もいらなければ、また木で作つたそんなものもいらないといふことを、快活に述べ立てた。

「まあ、何といふ考だらう。」と、マグロアール婦は往つたり來たりしながらただ一人で言つた。「あんな男を家に入れるなんて。そしてそれを自分の近くに寢かすなんて！　まあ盗まれただけで濟んだのが仕合といふものだ。ほんとに考へてみると身震ひがする。」

兄と妹とが食卓から立上らうとする時に、誰か戸を叩くものがあつた。

「おはひりなさい。」と司教は言つた。

戸は開かれた。異様な荒々しい一群が入口に現れた。その中の三人の者が、一人の男の頸筋を捉へてゐた。三人の者は憲兵で、一人の男はジャン-ヴア



ルジャンであつた。

その一群を率ゐてゐるらしい憲兵の班長が、戸の近くに立つてゐた。彼はひつて來て、軍隊式の敬禮をしながら、司教の方へ進んで來た。

「閣下……。」と彼は言つた。

その言葉に默り込んで悄然としてゐたジャン・ヴァルジャンは呆氣にとられた樣子で頭を擧げた。

「閣下！」と彼は呟いた。「ではこの人は司祭ではないんだな……。」

「默つてろ！」と一人の憲兵が言つた。「この方は司教閣下だぞ。」

その間にビャンヴニュ閣下は、老年にも拘らず、出來るだけ早く進み出て來た。

「あゝよく來なすつた。」と彼はジャン・ヴァルジャンを見ながら叫んだ。「私はあなたに逢へて嬉しい。所でどうしなすつた、私はあなたに燭臺も上げたのだが。あれもやつぱり銀で、二百法ぐらゐにはなるでせう。なぜあれも食器と一緒に持つて行きなさらなかつた。」

ジャン・ヴァルジャンは眼を開いて、尊むべき司教を眺めた。その表情は如

何なる言葉を以てしても恐らく傳へることは出來なかつたであらう。

「閣下、」と憲兵の班長は言つた、「それではこの男の言つたことは本當でありますか。私共はこの男に出逢つたのです。逃げるやうにして歩いてゐます。調べてみるためにつかまへてみました。するとこの銀の食器類を持つてゐました……。」

「そしてかう申したでせう、」と司教は微笑みながら、その言葉を遮つた、「一晩泊めて貰つた年寄の牧師から貰つたのだと。よく分つてゐます。そしてあなたは彼を此處まで連れて來られたのでせう。それは誤解でした。」

「左樣なわけでしたら、」と班長は言つた、「このまゝ放免しますが。」

「えゝ勿論です。」と司教は答へた。

憲兵等はジャン・ヴァルジャンを放した。ジャン・ヴァルジャンは後に退つた。

「本當に私は赦されたのかしら。」と彼は、殆ど舌も廻らないやうな聲で、宛も夢の中にでもゐるやうな風で言つた。

「さうだ、赦されたんだ。それが分らないのか。」と一人の憲兵が言つた。

「さあ出かける前に、」と司教は言つた、「此處にあなたの燭臺がある。それも持つて行きなさい。」

彼は煖爐の所へ行つて、銀の二つの燭臺を取り、それをジャン-ヴァルジャンの所へ持つて來た。二人の婦人は、何の言葉も發せず、何の身振りもせず、邪魔になるやうな眼付もせずに、彼の爲すまゝをぢつと見てゐた。

ジャン-ヴァルジャンは身體中を震はしてゐた。彼はぼんやりした風で機械的に二つの燭臺を取つた。

「それでは、」と司教は言つた、「平和に行きなさるがよい。――序に言つておきますが、今度おいでなさる時には、庭の方から廻つて來られるには及びませんよ。いつでも通の戸口から出入りなすつて宜しいのです。戸口は晝夜とも掛金で閉めてあるきりですから。」

それから彼は憲兵の方へ振向いた。

「皆さん、もうどうかお引取り下さい。」

憲兵等は立去つていつた。

ジャン-ヴァルジャンは氣を失ひかけてゐる者のやうだつた。

司教は彼に近寄つて、低い聲で言つた。

「忘れてはいけません、決して忘れてはいけませんぞ。この銀の器は正直な人間になるために使ふのだと、あなたが私に約束したことは。」

何も約束した覺えのないジャン-ヴァルジャンは、たゞ茫然としてゐた。司教はその言葉を發するのに強く力を籠めたのである。彼は一種の嚴かさを以てまた言つた。

「ジャン-ヴァルジャンさん、あなたはもう惡のものではない、善のものです。私が購ふのはあなたの魂です。私はあなたの魂を、暗黑な思想や破滅の精神から引出して、そしてそれを神に捧げます。」

ジャン-ヴァルジャンは逃げる樣にして町を出て行つた。彼は大急ぎで野の中を進み出して、前に現れる街道と云はず小徑と云はず、無茶苦茶に辿つて行つて、始終後戻をしてゐることにも氣附かなかつた。そのやうにして晝間中彼はさ迷ひ續けて、何も食べもしなければ、また別に空腹をも感じなかつた。彼は全く新しい一團の感情の囚となつてゐた。一種の憤怒を內に感じてゐ

たが、誰に對してだか自ら知らなかつた。感動したのかまたは屈辱を感じたのか、自分にも分らなかつた。時々異樣な感傷を覺えたが、彼はそれと戰つて、そしてそれに對抗せしむるに最近二十年間に得た頑な心を以てした。さういふ狀態は彼を疲らした。彼はまた不正なる不幸によつて與へられた一種の恐ろしい落着きが、心のうちでぐらつくのを見て不安を覺えた。その恐ろしい落着きに代らうとしてゐるものは何であるか、自ら尋ねてみた。往々彼は憲兵に連れられて獄に投じられた方が本當によかつたと思ひ、事件がこんな風にならなかつた方がよかつたのだと思つた。その方が彼の心を亂すことは少かつたであらう。季節はよほど進んではゐたが、なほ其處此處の生籬のうちには、後れ咲の花が殘つてゐて、通りすがりにその香が、彼に幼時のことを思ひ出させた。それらの思ひ出は彼には殆ど堪へ難いものであつた、もう永い間さういふ思ひ出が浮かんで來たことは嘗てなかつたのだから。

言葉に言ひ現し難い考が、かくて終日彼の裡に集つて來た。

太陽が傾いて沒せんとする時、小石さへその影を地上に長く引く頃、ジャン・ヴァルジャンは全く荒涼たる霜枯色の曠野の中に、一叢の茨の後に坐つた。

ディーニュ　フランスのバスーアルプ縣の首邑。

サヴォア　伊・瑞國境に位するフランスの縣名。

地平線にはアルプス連山が聳えてゐるばかりだつた。遠く村落の鐘樓の影さへも見えなかつた。ジャン・ヴァルジャンはディーニュから多分三里位は來てゐた。平野を横切つてゐる一筋の小徑が、茨から數歩の所に走つてゐた。

彼は考に沈んでゐた。その樣子は、出逢ふ人の眼に彼の纏つた襤褸を一層恐ろしく映ぜしめたであらう。と、その時、彼の耳に樂しさうな響が聞えて來た。

彼は首を廻らした、そして十歳ばかりのサヴォア生の少年が、唄を歌ひながら小徑をやつて來るのを見た。絞絃琴（ケイエル）を脇につけ、モルモットの箱を背に負つてゐた。地方から地方へ渡り歩いて、ズボンの破れ目から膝頭を覗かせてゐる、かのおとなしい快活な少年の一人であつた。

唄を歌ひながら少年は、時々歩を止めて、手に持つてゐる數個の貨幣を手玉に取つて弄んでゐた。恐らくそれは彼の全財產であつたらう。その貨幣の中には一つ四十スー銀貨がはひつてゐた。

少年はジャン・ヴァルジャンには氣がつかないで茨の側に立止つた、そして一握の貨幣を放り上げた。それまで彼は巧みにその凡てを手の甲に受け止

めてゐたのであつた。

がこの度は、四十スー銀貨が手から滑つて、茨の方へ轉がつて、ジャン-ヴァルジャンの所まで行つた。

ジャン-ヴァルジャンはその上に足先を乘せた。

でも少年はその貨幣を見やつてゐて、彼がさうするのを見て取つた。

少年は少しも驚かないで、彼の方へ眞直にやつて來た。

それは極めて淋しい場所であつた。眼の屆く限り、野にも道にも誰も居なかつた。非常に高く空を飛んでゆく渡り鳥の一群の、弱いかすかな鳴聲が聞えるばかりだつた。子供は背を太陽に向けてゐて、髪の毛のうちには金色の光の線が流れてゐた。そしてジャン-ヴァルジャンの荒々しい顏は、眞赤な光で赤く照らされてゐた。

「小父さん、」とそのサヴォアの少年は、無智と無邪氣とから成る子供らしい信頼の調子で言つた、「私のお金を。」

「お前の名は何といふのか。」とジャン-ヴァルジャンは言つた。

「ブティー-ジェルヴェーつて言ひます。」

「行つちまへ。」とジャン-ヴァルジャンは言つた。

「小父さん、」と少年はまた言つた、「私のお金を返して下さいな。」

ジャン-ヴァルジャンは頭を垂れて、答へなかつた。

少年はまた始めた。

「私のお金を、小父さん。」

ジャン-ヴァルジャンの目は、ぢつと地面を見つめてゐた。

「私のお金をさ！」と少年は叫んだ。「私の白いお金を。私の銀貨をさ。」

ジャン-ヴァルジャンはそれを少しも耳にしなかつたかのやうであつた。

少年はその上着の襟をとらへて、彼を搖つた。同時にまた、自分の貨幣の上に乘せられてゐる鐵鋲を打つた大きなその靴を動かさうと努めた。

「私のお金をよう！　四十スー銀貨を！」

少年は泣いてゐた。ジャン-ヴァルジャンは頭を擧げた。でも彼はなほ坐つてゐた。彼の眼付は亂れてゐた。彼は驚いたやうに少年を見つめ、それから杖の方へ手を伸べて、恐ろしい聲で叫んだ。

「誰だ、貴樣は。」

「私よ、小父さん。」と少年は答へた。「プティー・ジェルヴェーよ。私ですよ、私ですよ。どうか四十スー銀貨を返して下さいな。ねえ小父さん、足を除けて下さいよう。」

それから、小さくはあつたが彼は苛立つて來て、殆ど脅すやうな樣子になつた。

「さあ、足を除けてくれますか。足を除けて、さあ！」

「あゝまだ貴樣居たのか。」とジャン・ヴァルジャンは言つた。そしてやはり貨幣の上をふまへながら、突然すつくと立上つて言ひ足した。「失せやがれ！」

少年は喫驚して彼を眺めた。そして頭から足の先まで震へ上り、一寸惘然としてゐた後で、ふり返りもせず聲も立てず、一目散に逃出した。

けれど、暫く行くと息が續かないで彼は立止つた。そしてジャン・ヴァルジャンは、ぼんやり何か考へ込んでゐるうちにも、少年の歔欷（すすりなき）く聲を聞いた。

やがて少年の姿は見えなくなつた。

太陽は沒してゐた。

ジャン・ヴァルジャンのまはりには影が迫つて來た。彼はその日何も食べてゐなかつた。少し熱もあつたらしい。

彼は立ちつくしてゐた、少年が逃出した時のまゝの姿勢だつた。長い不規則な間を置いては、呼吸が胸を膨らした。彼の眼は十一二歩前のところに据ゑられて、草の中に落ちてゐる青い陶器の古い破片の形を注意深く見究めてゐるやうだつた。と突然彼は身震ひをした。夕の冷氣を感じたのであつた。

彼はまた額に帽を深く引下げ、機械的に手探で上着の前を合せ、釦（ボタン）をはめ、一歩前に出て、地面から杖を取上げるために身を屈めた。

その時、四十スー銀貨が彼の眼に止まつた。足で半ば地面の中にふみ込まれて、小石の間に光つてゐた。

宛も電氣に觸れたかのやうだつた。「これは何だ。」と彼は口の中で言つた。彼は三歩退いた。けれども、一瞬間前まで足でふみつけてゐたその場所から目を離すことが出來なくて立止つた。闇の中に光つてゐるそのものを、見開いて自分を見つめてる何かの眼のやうに感じたかのやうだつた。

暫くしてから、彼は痙攣的にその銀貨の方へ進んでゆき、それを掴み、身を起しながら遠く平野のうちを見渡し始めた。脅かされた野獸が隱れ場を求む

るかのやうに、突立ちながら身を震はして、地平線の彼方を方々同時に見廻した。

彼の目には何もはひらなかつた。夜の闇は落ちかゝつて、平原は寒く茫漠としてをり、大きな紫の靄が夕の薄明のうちに立昇つてゐた。

彼は「あゝ！」と歎息をもらして或方向へ、少年の姿の消えた方へ、急いで歩き出した。百歩ばかりも歩いたのちに、彼は立ちどまり、あたりを眺めたが、何も見えなかつた。

すると彼はあらん限りの聲を搾つて叫んだ。「プティー-ジェルヴェー！プティー-ジェルヴェー！」

彼は口を噤んで、答を待つた。

何の答もなかつた。

野は荒涼として陰鬱だつた。彼は廣々とした空間に取りかこまれてゐた。まはりに在るものとては、たゞ見透せない闇と聲を呑込む靜寂とばかりだつた。

凍るやうな北風が吹いて、彼のまはりの凡てのものに悲愴な氣を與へてゐた。あたりの灌木は言ふに言はれぬ狂暴さで、その痩せた小さな枝をふり動かしてゐた。宛もそれは誰かを脅し、追つかけてゐるやうであつた。

彼はまた歩き出し、それから駈出した。そして時々立止つては、最も恐ろしい、また最も悲しげな聲を搾つて、寂寞の中に叫んだ。「プティー-ジェルヴェー！プティー-ジェルヴェー！」

もし少年がそれを聞いたとしても、必ずや恐れを懷いて身を現さなかつたであらう。然し、少年は勿論もう遠くに行つてゐたに違ひない。

ジャン-ヴァルジャンは馬に乘つた一人の牧師に出逢つた。その側へ行つて言つた。

「司祭さん、あなたは子供が一人通るのを見かけられはしませんでしたか。」

「いゝえ。」牧師は言つた。

「プティー-ジェルヴェーといふんですが。」

「私は誰にも逢ひませんでしたよ。」

彼は五法の貨幣を二つ財布から取り出して、それを牧師に渡した。

「司祭さん、これは貧しい人達に施して下さい。――司祭さん、十歳ばかりの小

さい子供です。たしか一疋のモルモットと絞絃琴（ケイエル）とを持つてゐます。向うへ行きました。サヴォアの者です。御存じありませんか。」

「私はその子に逢ひませんよ。」

「プティー-ジェルヴェーに？　この邊の村の者ではありますまい。どうでせうか。」

「あなたが言ふ通りなら、それはこの邊の子供ではありますまい。この地方をそんな人達が通ることはありますが、何處の者だか誰も知りませんよ。」

ジャン-ヴァルジャンは荒々しく五法の貨幣をもう二つ取出して、それを牧師に與へた。

「貧しい人達にやつて下さい。」と彼は言つた。

それから彼は心亂れたやうに附加へた。

「司祭さん、私を捕縛して下さい。私は泥棒です。」

牧師はひどく慴（おび）えて、馬に拍車をくれて逃出した。

ジャン-ヴァルジャンは最初向つてゐた方向にまた走り出した。

彼はそのやうにして、見廻し、呼び、叫びながら、かなり長い間行つたが、もう誰にも出逢はなかつた。二三度彼は、何か人の横たはつてゐるやうにも、また蹲（うづく）まつてゐるやうにも見えるものの方へ、野の中を駈けて行つた。が、それはただ荊棘（いばら）であつたり、地面に出てゐる岩であつたりするきりだつた。終に、三つの小徑が交叉してゐる所に出て彼は止つた。月が出てゐた。彼は遠くに眼をやつて、最後にも一度叫んだ。「プティー-ジェルヴェー！　プティー-ジェルヴェー！　プティー-ジェルヴェー！」その叫は靄の中に消失せて、反響をも返さなかつた。彼はなほ呟いた。「プティー-ジェルヴェー！」然しその聲は弱々しくて、殆ど舌が廻らないかのやうだつた。それは彼の最後の努力であつた。彼の膝は俄に立つて居るに堪へられなくなつた。宛も何か目に見えない力によつて、惡心の重みで突然押潰されたかのやうであつた。彼は或大きな石の上にがつくりと身を落して、兩手で髪の毛を掴み、顏を膝に押しあて、そして叫んだ。「あゝ俺は慘（みじ）めな男だ！」

その時彼は、胸が一ぱいになつて泣出した。十九年この方、涙を流したのはそれが初めてであつた。ヴィクトル-ユーゴー原作

ユーゴー　フランスの小説家、劇作家。一八〇二―一八八五年。

森鷗外　文學者。醫學博士、文學博士。名は林太郎。島根縣の人。大正十一年歿、年六十三。

元文元年　八代將軍吉宗時代の頃。

二　最後の一句

森鷗外

桂屋にかぶさつて來た厄難と云ふのはかうである。

主人太郎兵衞は船乘とは云つても、自分が船に乘るのではない。北國通ひの船を持つてゐて、それに新七と云ふ男を乘せて、運送の業を營んでゐるのである。大阪では此の太郎兵衞のやうな男を居船頭と云つてゐた。

元文元年の秋、新七の船は出羽國秋田から米を積んで出帆した。其の船が不幸にも航海中に風波の難に逢つて、半ば難船の姿になつた爲に、積荷の半分以上は流失した。新七は殘つた米を賣つて金にして、大阪へ持つて歸つた。

さて新七が太郎兵衞に言ふには、「難船をした事は港々で知つてゐる。殘つた積荷を賣つた此の金は、もう米主に返すには及ぶまい。これは後の船を仕立てる費用に當てようではないか。」

太郎兵衞はそれまで正直に營業してゐたのだが、營業上に大きい損失を見たすぐ後に、現金を目の前に並べられたので、ふと良心の鏡が曇つて、其の金を受取つてしまつた。

平野町のおばあ樣　太郎兵衞の女房の母。太郎兵衞の死罪に極つたことを告げに來た人。

すると、秋田の米主の方では、難船の知らせを得た後に、殘り荷のあつた事やら、それを賣つたことやらを人傳に聞いて、わざ〳〵人を調べに出した。そして新七の手から太郎兵衞に渡つた金高までを探り出してしまつた。

米主は大阪へ出て訴へた。新七は逃走した。そこで太郎兵衞が入牢して、とう〳〵死罪に行はれることになつたのである。

平野町のおばあ樣が來て、恐ろしい話をするのを、姉娘のいちが立聞をした晩の事である。桂屋の女房は、いつも繰言を言つて泣いた跡で出る疲が出て、ぐつすり寢入つた。女房の兩脇には初五郎ととくとが寢てゐる。初五郎の隣には長太郎が寢てゐる。とくの隣にまつ、それに並んでいちが寢てゐる。

暫く立つて、いちが何やら蒲團の中で獨言を言つた。「あゝ、さうしよう。きつと出來るわ。」と言つたやうである。

まつがそれを聞附けた。そして、「姉さん、まだ寢ないの。」と言つた。

「大きい聲をおしでない。わたし好い事を考へたから。」いちは先づかう言つて妹を制して置いて、それから小聲でかういふ事を耳語いた。「お父さんは

あさつて殺されるのである。自分はそれを殺させぬやうにすることが出來ると思ふ。どうするかと云ふと、願書と云ふものを書いてお奉行様に出すのである。しかし只殺さないで置いて下さいと言つたつて、それでは聽かれない。お父さんを助けて、其の代りに私ども子供を殺して下さいと言つて賴むのである。それをお奉行様が聽いて下さつて、お父さんが助かれば、それで好い。子供は本當に皆殺されるやら、わたしが殺されて、小さい者は助かるやら、それは分らない。只お願をする時、長太郎だけは一しよに殺して下さらないやうに書いて置く。あれはお父さんが此の家の跡を取らせようと言つていらつしやつたのだから、殺されない方が好いのである。」いちは妹にそれだけの事を話した。

「でもこはいわねえ。」と、まつが言つた。

「そんなら、お父さんが助けてもらひたくないの。」

「それは助けてもらひたいわ。」

「それ御覽、まつさんは只わたしに隨いて來て、同じやうにさへしてゐれば好いのだよ。わたしが今夜願書を書いて置いて、明日の朝早く持つて行きませうね。」いちは起きて、手習の清書をする半紙に、平假名で願書を書いた。父の命を助けて、其の代りに自分の妹のまつ・とく・弟の初五郎をお仕置にして戴きたい。但し長太郎だけはお許し下さるやうにと云ふだけの事ではあるが、どう書綴つて好いのかわからぬので、幾度も書損つて、清書の爲に貰つてあつた白紙が殘り少になつた。併しとう〳〵一番鷄の啼く頃に願書が出來上つた。

願書を書いてゐるうちに、まつが寢入つたので、いちは小聲で呼起して、床の傍に疊んであつた不斷着に着更へさせた。そして自分も支度をした。

女房と初五郎とは知らずに寢てゐたが長太郎が目を醒して、「ねえさん、もう夜が明けたの。」と言つた。

いちは長太郎の床の傍へ往つてさゝやいた。「まだ早いからお前は寢ておいで。ねえさん達は、お父さんの大事な御用で、そつと往つて來るところがあるのだからね。」

「そんならおいらも往く。」と言つて、長太郎はむつくり起き上つた。

いちは言つた。「ぢやあ、お起き、着物を着せて上げよう。長さんは小さくても男だから、一しよに行つてくれゝば、其の方が好いのよ。」と言つた。

女房は夢のやうにあたりの騷がしいのを聞いて、少し不安になつて寢返りをしたが、目は醒めなかつた。

三人の子供がそつと家を拔け出したのは、二番鷄の啼く頃であつた。戸の外は霜の曉であつた。提灯を持つて、拍子木を敲いて來る夜廻の爺さんに、「お奉行樣の所へはどう往つたら往かれよう。」といちがたづねた。爺さんは親切な、物分りの好い人で、子供の話を眞面目に聞いて、月番の西奉行所のある處を丁寧に敎へてくれた。

西町奉行所　今の大阪商品陳列所の位置に在つた。

當時の町奉行は、東が稻垣淡路守種信で、西が佐々又四郎成意（なりむね）である。そして十一月には西の佐々が月番に當つてゐたのである。

爺さんが敎へてゐるうちに、それを聞いてゐた長太郎が、「そんならおいらの知つた町だ。」と言つた。そこで姉妹は長太郎を先に立てて歩き出した。

やう〳〵西奉行所に辿り着いて見れば、門がまだ締つてゐた。門番所の窓の下に往つて、いちが「もし〳〵。」と度々繰返して呼んだ。暫くして窓の戸があいて、そこへ四十恰好の男の顏が覗いた。「やかましい。なんだ。」

「お奉行樣にお願があつてまゐりました。」と、いちが丁寧に腰を屈めて言つた。

「えゝ。」と言つたが、男は容易に詞の意味を解せぬらしい樣子であつた。いちは又同じことを言つた。

男はやう〳〵わかつたらしく、「お奉行樣には子供が物を申上げる事は出來ない。親が出て來るが好い。」と言つた。

「いゝえ、父は明日おしおきになりますので、それに就いてお願がございます。」

「なんだ。あしたおしおきになる。それぢやあ、お前は桂屋太郎兵衞の子か。」

「はい。」と、いちが答へた。

「ふん。」と言つて、男は少し考へた。そして言つた。「怪しからん。子供までが上を恐れんと見える。お奉行樣はお前達にお逢ひはない、歸れ〳〵。」かう言つて、窓を締めてしまつた。

まつが姉に言つた。「ねえさん、あんなに叱るから歸りませう。」

いちは言つた。「默つてお出で。叱られたつて歸るのぢやありません。ねえさんのする通りにしてお出で。」かう言つて、いちは門の前にしやがんだ。まつと長太郎とは隨いてしやがんだ。

三人の子供は門のあくのを、大分久しく待つた。やう〳〵貫木を外す音がして、門があいた。あけたのは、前に窓から顔を出した男である。

いちが先に立つて門内に進み入ると、まつと長太郎とが背後に續いた。

いちの態度が餘り平氣なので、門番の男は急に支へ留めようともせずに居た。そして暫く三人の子供の玄關の方へ進むのを、目を睜つて見送つてゐたが、やうやう我にかへつて「これ〳〵。」と聲をかけた。

「はい。」と言つて、いちはおとなしく立止つて振返つた。

「どこへ往くのだ。さつき歸れと言つたぢやないか。」

「さうおつしやいましたが、わたくしどもはお願を聞いて戴くまでは、どうしても歸らない積りでございます。」

「ふん。しぶとい奴だな。兎に角そんな所へ往つてはいかん。こつちへ來い。」

子供達は引返して、門番の詰所へ來た。それと同時に玄關脇から「なんだなんだ。」と言つて、二三人の詰衆が出てきて、子供達を取卷いた。いちは殆どかうなるのを待構へて居たやうに、そこに蹲つて懷中から書付を出して、眞先にゐる與力の前に差付けた。

まつと長太郎も一しよに蹲つて禮をした。

書付を前へ出された與力は、それを受取つたものか、どうしたものかと迷ふらしく、默つていちの顔を見下してゐた。

「お願でございます。」といちが言つた。

「こいつ等は木津川口で晒し者になつてゐる桂屋太郎兵衞の子供でございます。親の命乞をするのだと言つてゐます。」と、門番が傍から說明した。

與力は同役の人達を顧みて、「では兎に角書付を預つて置いて、伺つて見ることにしませうかな。」と言つた。それには誰も異議がなかつた。

與力は願書をいちの手から受取つて、玄關にはひつた。

西町奉行の佐々は、兩奉行の中の新參で、大阪に來てから、まだ一年立つてゐない。役向の事は總べて同役の稻垣に相談して、城代に伺つて處置するのであつた。それであるから、桂屋太郎兵衞の公事に就いて、前役の申し繼を受けてから、それを重要事件として氣に掛けてゐて、やう〳〵處刑の手續が濟んだのを重荷を卸したやうに思つてゐた。

そこへ今朝になつて、宿直の與力が出て、命乞の願に出た者があると言つたので、佐々は折角運ばせた事に邪魔がはひつたやうに感じた。

「參つたのはどんなものか。」佐々の聲は不機嫌であつた。

「太郎兵衞の娘兩人と忰とがまゐりまして、年上の娘が願書を差上げたいと申しますので、これに預つてをります。御覽になりませうか。」

「それは目安箱をもお設けになつてをる御趣意から、次第によつては受取つても宜しいが、一應はそれ〴〵手續のあることを申し聞かせんではなるまい。兎に角預つてをるなら、内見しよう。」

與力は願書を佐々の前に出した。それを披いて見て、佐々は不審らしい顏をした。「いちといふのがその年上の娘であらうが、何歳になる。」

「取調はいたしませんが、十四五歳位に見受けまする。」

「さうか。」佐々は暫く書付を見て居た。不束な假名文字で書いてはあるが、條理が善く整つてゐて、大人が書かせたのではあるまいかと云ふ念がふと萌した。續いて、上を僞る横着者の所爲ではないかと思議した。それから一應の處置を考へた。太郎兵衞は明日の夕方まで晒すことになつてゐる。刑を

執行するまでには、まだ時がある。それまでに願書を受理しようとも、すまいとも同役に相談し、上役に伺ふことも出來る。又縱しや其の間に情僞があるとしても、相當の手續をさせるうちには、それを探ることも出來よう。兎に角子供を歸さうと、佐々は考へた。

そこで與力にはかう言つた。『此の願書では奉行に出されぬから持つて歸つて町年寄に出せ。』と言へ。」と言つた。

與力は、門番が歸さうとしたが、どうしても歸らなかつたと云ふことを、佐々に言つた。佐々は「そんなら菓子でも遣つて、賺して歸せ。それでも聽かぬなら引立てて歸せ。」と命じた。

與力の座を起つた跡へ、城代太田備中守資晴が訪ねて來た、正式の見廻りではなく、私の用事があつて來たのである。太田の用事が濟むと、佐々は只今かやうかやうの事があつたと告げて、自分の考を述べ、指圖を請うた。

太田は別に思案もないので、佐々に同意して、午過ぎに東町奉行稻垣をも出席させて、町年寄五人に桂屋太郎兵衞が子供を召連れて出させることにした。情僞があらうかと云ふ佐々の懸念も、尤もだと云ふので、白洲へは責道具を並

べさせる事にした。これは子供を嚇して、實を吐かせようと云ふ手段である。丁度此の相談が濟んだところへ前の與力が出て、入口に控へて氣色を伺つた。

「どうぢや。子供は歸つたか。」と、佐々が聲をかけた。

「御意でござりまする。お菓子を遣はしまして歸さうといたしましたが、いちと申す娘がどうしても聽きませぬ。とう〳〵願書を懷へ押込みまして、引立てて歸しました。妹娘はしく〳〵泣きましたが、いちは泣かずに歸りました。」

「餘程情の剛い娘と見えますな。」と、太田が佐々を顧みて言つた。

十一月二十四日の未の下刻である。西町奉行の白洲ははれ〴〵しい光景を呈してゐる。書院には、兩奉行が列座する。奥まつた處には別席を設けて、表面の出席ではないが、城代が取調の模樣を他所ながら見に來て居る。緣側には取調を命ぜられた與力が、書役を隨へて着座する。

同心等が三道具を衝立てて、嚴めしく警護してゐる庭に、拷問に用ひるあらゆる道具が並べられた。そこへ桂屋太郎兵衞の女房と五人の子供とを連れて、町年寄五人が來た。

三道具　衝棒・刺叉・そでがらみの三種の道具。

訊問は女房から始められた。しかし名を問はれ、年を問はれた時に、かつがつ返事をしたばかりで、其の他の事を問はれても「一向に存じませぬ。」「恐れ入りました。」と言ふより外何一つ申し立てない。

次に長女いちが調べられた。當年十六歳にしては、少し稚く見える。瘠肉の小娘である。併しこれは些の臆する氣色もなしに、一部始終の陳述をした。祖母の話を物陰から聞いた事、夜になると床に入つてから、出願を思ひ立つたこと、妹まつに打明けて勸誘した事、自分で願書を書いた事、長太郎が目を醒したので同行を許し、奉行所の町名を聞いてから案内をさせた事、奉行所に來て門番と應對し、次いで詰衆の與力に願書の取次を賴んだ事、與力等に强要せられて歸つた事、凡そ前日來經歷した事を問はれるまゝにはつきり答へた。

「それではまつの外には誰にも相談はいたさぬのぢやな。」と、取調役が問うた。

「誰にも申しません。長太郎にも精しい事は申しません。お父さんを助けて戴く樣にお願しに往くと申しただけでございます。お役所から歸りまし

て、年寄衆のお目に掛りました時、わたくしども四人の命を差上げて、父をお助け下さるやうに願ふのだと申しましたら、長太郎がそれでは自分も命を差上げたいと申して、とう〳〵わたくしに自分だけのお願書を書かせて持つてまゐりました。」

いちがかう申し立てると、長太郎が懷から書付を出した。

取調役の指圖で、同心が一人長太郎の手から書付を受取つて、緣側に出した。取調役はそれを披いて、いちの願書と引比べた。いちの願書は町年寄の手から、取調の始まる前に、出させてあつたのである。

長太郎の願書には、自分も姉や、妹・弟達と一しよに、父の身代りになつて死にたいと、前の願書と同じ筆蹟で書いてあつた。

取調役は「まつ。」と呼びかけた。しかしまつは呼ばれたのに氣がつかなかつた。いちが「お呼びになつたのだよ。」と言つた時、まつは始めておそる〳〵頂垂れてゐた頭を擧げて、緣側の上の役人を見た。

「お前は姉と一しよに死にたいのだな。」と、取調役が問うた。

まつは「はい。」と言つて頷いた。

次に取調役は「長太郎。」と呼び掛けた。

長太郎はすぐに「はい。」と言つた。

「お前は書付に書いてある通りに、きやうだい一しよに死にたいのぢやな。」

「みんな死にますのに、わたしが一人生きてゐたくはありません。」と、長太郎ははつきり答へた。

「とく。」と取調役が呼んだ。とくは姉や兄が順序に呼ばれたので、こん度は自分が呼ばれたのだと氣が付いた。そして只目を睜つて役人の顏を仰ぎ見た。「お前も死んでも好いのか。」

とくは默つて顏を見てゐるうちに、脣に血色が亡くなつて、目に涙がいつぱい溜つて來た。

「初五郎。」と、取調役が呼んだ。

やう〳〵六つになる末子の初五郎は、これも默つて役人の顏を見たが、「お前はどうぢや、死ぬのか。」と問はれて、活潑にかぶりを振つた。書院の人々は覺えず、それを見て微笑んだ。

此の時佐々が書院の敷居際まで進み出て、「いち。」と呼んだ。

「はい。」

「お前の申し立てに嘘はあるまいな。若し少しでも申した事に間違があつて、人に敎へられたり、相談をしたりしたのなら、今すぐに申せ。隱して申さぬと、そこに並べてある道具で誠の事を申すまで責めさせるぞ。」佐々は責道具のある方角を指さした。

いちは指ざされた方角を一目見て、少しもたゆたはずに、「いえ、申した事に間違はございません。」と言放つた。其の目は冷かで、其の詞は徐かであつた。

「そんなら今一つお前等に聞くが、身代りをお聞屆になるとお前達はすぐに殺されるぞよ。父の顏を見ることは出來ぬが、それでも好いか。」

「よろしうございます。」と、同じやうな冷かな調子で答へた。が、少し間を置いて、何か心に浮かんだらしく、「お上の事には間違はございますまいから。」と言足した。

佐々の顏には、不意打に逢つたやうな驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、險しくなつた目がいちの面に注がれた。憎惡を帶びた驚異の目とでも言はうか。しかし佐々は何も言はなかつた。

次いで佐々は何やら取調役にさゝやいたが、間もなく取調役が町年寄に、「御用が濟んだから引取れ。」と言渡した。

白洲を下る子供等を見送つて、佐々は太田と稻垣とに向つて、「生ひ先の恐ろしいものでござりますな。」と言つた。心の中には、哀な孝行娘の影も殘らず、人に敎唆せられたおろかな子供の影も殘らず、只氷のやうに冷かに、刃のやうに鋭い、いちの最後の詞の最後の一句が反響してゐるのである。元文頃の德川家の役人は固よりマルチリウムといふ洋語も知らず、又當時の辭書には獻身と云ふ譯語もなかつたので、人間の精神に老若男女の別なく、罪人太郎兵衞の娘に現れたやうな作用があることを知らなかつたのは無理もない。しかし、獻身の中に潛む反抗の鋒は、いちと語を交へた佐々のみではなく、書院にゐた役人一同の胸をも刺したのであつた。「鷗外全集」

マルチリウム　ドイツ語、獻身。

罪人太郎兵衞　元文四年三月二日遂に死罪赦免となつた。

昭和三年一月三十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和二年九月二十三日印刷
昭和二年九月二十八日發行
昭和三年一月二十日訂正再版印刷
昭和三年一月二十三日訂正再版發行

松村檢印

不許複製

著者　松村武雄

發行者　東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地　大葉久吉

發行兼印刷者　大阪市西區阿波堀通四丁目二十番地　柏佐一郎

發行所　東京市日本橋區本銀町（振替東京一一八〇）
大阪市西區阿波堀通四（振替大阪四三）
神戸市元町通五丁目（振替大阪九五二一）

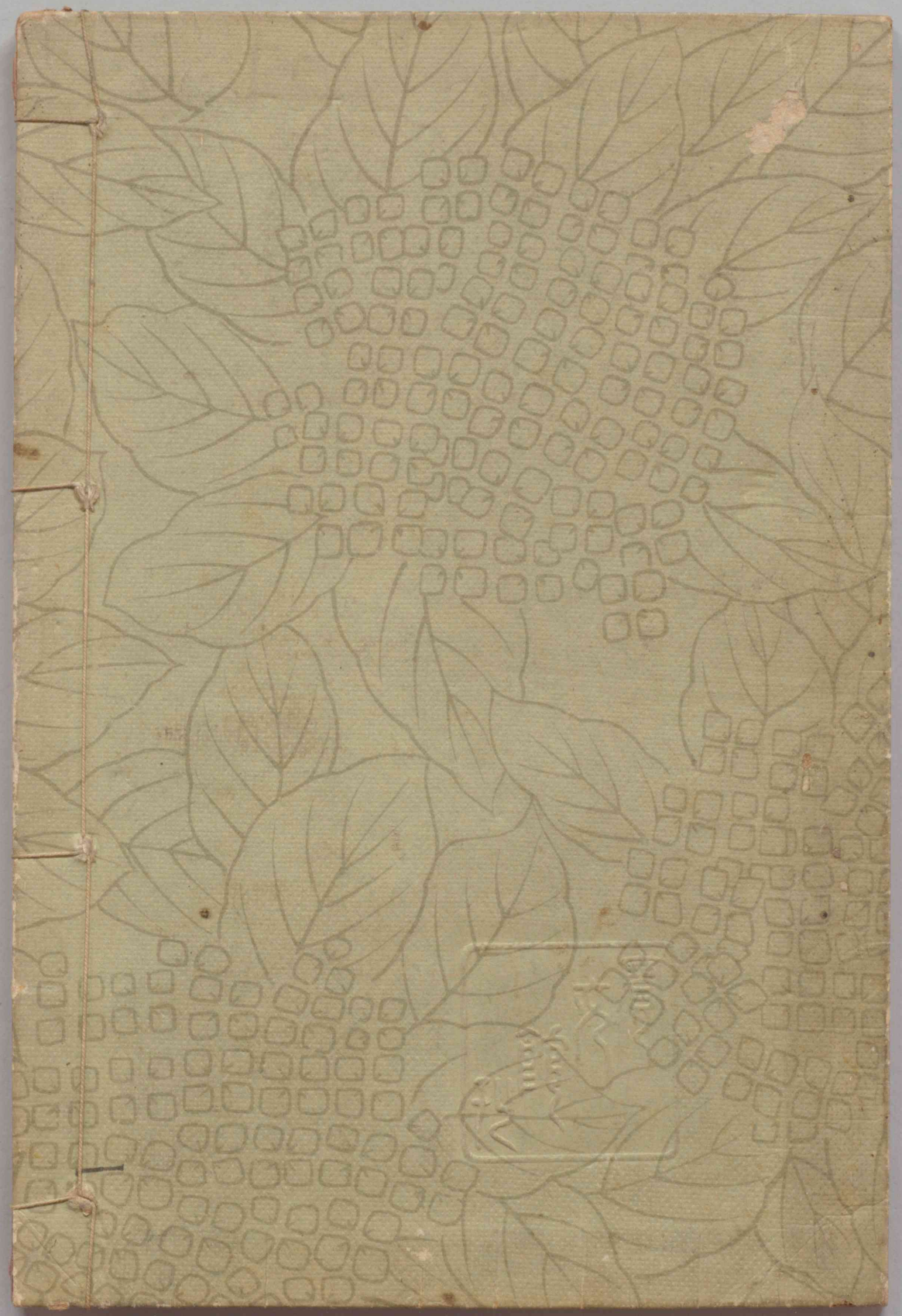
寶文館

最新女子國文

卷別	定價金	昭和五年度臨時定價
一	四拾參錢	七拾錢
二	四拾貳錢	六拾八錢
三	四拾參錢	七拾錢
四	四拾參錢	七拾錢
五	四拾壹錢	六拾七錢
六	四拾貳錢	六拾八錢
七	四拾壹錢	六拾七錢
八	四拾參錢	七拾錢
九	四拾參錢	七拾錢
十	四拾參錢	七拾錢

最新女子國文　卷六　終

研究社

京三学年B組

今中静子